

きは無論異とするに足りないが、大小の商業取引に従へるもの、或は外國の知識を有して可なり
事理を辨へてゐる筈のものでも矢張り國民性は争へぬものである。固より雷同も利用の方法次第
では楫の取りやうで爲になることもあるが、雷同の影響を蒙つて不利な結果を見る場合が多い、
日本人には特に此間の消息を審にし、雷同の心理の中樞に就いて深く講究を重ねておく必要があ
るのである。實際揚子江方面の田舎を旅行し月夜、中庭に出で腰をかけ土民共と四方山の話に耽
つて居ると、東洋（日本）にも月亮（お月さま）があるか。矢張り月は圓いかと云ふ奇問を發す
る。貴國のと同様の（同じ物）だが東洋で見ると遙かに大きいと答へたら興がつて聞いて居た。
また太陽も晝は出るかと云ふやうなことも聞かれた。全く太古の民以上であるから迷信でも虚傳
でも實話でも一樣に感ずるに違ひない。これは餘談ながら土民の知識程度の一斑を付加して參考
として書いたのである。

支那内地の風情

茲では支那文化の眞面目なる所を看破し、現在に於ける支那民族の實際生活を眞に味はつて見たいと云ふ立場から旅行を見るのである。之を見ようと云ふには、潔癖性の日本人には無理な注文であるが、支那では成だけ臭くて穢くて踏み込めない所に興味を以て入込むことが第一緊要事である。又時には鈴の音騒がしき驢馬に打跨り緩き手綱も片手に悠々と柳楊の並木路を行くとか、或は又頑丈な兩輪の縁も厚き支那馬車に揺りに揺られて幾度が幌の下から外へ投げ出されるとか、或は又船を借りて湖上河流を行くに船頭共の權の漕ぎかたや、それに嚙子供の仕事のけなげさ加減を細くよく見て居るとか。色々その郷に入りては郷の風俗人情を見ることが肝心であるのである。ひろく文化の調査を試むるには、何事によらず孰れのものも材料とならぬものはない。

清朝の黄金時代に出來た大理石鋪道や金殿玉樓の今も尙きらびやかなるに就けて王公貴人の生活振を想像するのも一つの見方となり得べく、又ひどい里閭に踏込んで、如何がせしか殆ど半も屋根瓦の剥ぎ取られて屋根が半分なくなつて了ひ、土壁も相應に角度の十度以上も傾けるかと思はれる一農家の片隅に、纏足をした野嬢の生の大根の輪切りにしたのをさも甘さうに頬張つてたべてゐるところを見るなど、こは確かに寒村の面目を見るに足るべき一材料となるのである。かやうな見地からすると、毎日の旅行先きで經驗する事柄の中には文化の研究上俄に棄て難い事項

がたくさんある譯である。

然し、支那文化の取調べに出掛ける支那内地旅行は決して樂ではない。贅澤を求めないことは固よりの話であるが内地旅行にはそれ特有の困難苦勞がある。唯多年胸中に湧き起つて居る興味から自ら好んで出掛ける支那旅行は内心或る目的と樂しみを包んでゐるが爲に、所謂困難苦勞は何でもないことになるのである。恐らく頭等客として汽車で素通りの旅行をした人々よりは或る意味に於て獲る所が多くはないかと思ふのである。さて支那内地旅行の困難と云ふ點に就いて日本人の誰しも認めてゐる常態は

- 一、土地廣く路悪しきが故徒歩で行き難いこと。
- 二、陸行水行共に生命財産の保障を得がたきこと。
- 三、銀行なき旅行に多額の弗銀を持參するの止むなきに至つた場合その銀の隠し場に困難するべし。
- 四、夏の旅行には南京虫に攻められ北部には又蝮(蛇蝎の蝎)の危害ある事。
- 五、衣食住に就いては衣は格別の事なきも、食事と宿屋の事には慣れる迄少からぬ困苦を忍ぶべきこと。

などが不取敢其の主なるものに數へて差支あるまいと考へる。固より此の困難と云ふのも人によりて又時と場合によりて相違があり、又南部と北部とも違ひがある。或は春夏秋冬とか晝夜とか節季の、正、五、九の三月の境目と平日とでちがふ。夫にまた旅行のことであるから費用のかけかた、官邊の便宜の有無によることもあるであらう。然しながら支那旅行は常に日本内地のそれに比し必ず困難苦勞厭なことのみが多いのであるかと云ふとそは必ずしも然らず、田舎の道には山中の棧道は固より谷間の小徑に至るまで亭舎が數里(支那里)毎に必ず往還を蔽うて建造されてゐる。古來、路の亭舎の置かれてゐることは周代あたりの古い昔から既に有名な話である。今では南方に行くとき亭の設備が多くて行人の心を樂しましめて居る。また毎朝御茶の施しが道路に出されて行人に何時でも汲んで飲むやうに設備されて居る。又旅行途中で荷擔ぎ人夫を雇ふ場合には賃銀日給が廉であるから氣骨が折れない、要するに支那内地旅行の常感として苦勞や危険や五月蠅いことやや珍しくない位續出するのであるが、風俗、習慣、文學、古典等あらゆる文化的の趣味を以て古禮今俗の共通點を察し、人情の機微に觸れて見たいと云ふ考へで南船北馬を事として居る時は常に所謂隨處に主たることが出來て南京虫の來襲が却つて一入の興を添へて居ることになる位のものである。

一、文明地域の旅行

七四六

支那旅行とか、支那遊歴とか云へば、一方には古典的な風流事を聯想すると同時に他方には必ず不便困難と云ふ事を聯想する。政治とか利源とか云ふ方面に關係なく唯單に文化調査の目的で視察旅行を試みて見ようとする自分共の立場から云へば斯る場合によしや不便困苦に際會しようとも、又不慮の危険に遇ふことがあらうとも开は寧ろ支那文化の眞諦を味はふ上の好材料として目するのである。従つて旅中の困苦不便は最初から苦にしない。寧ろ問題にしてゐない位のものである。然し實際支那旅行が慣れぬ日本人に困難であることは争へない事實である、困難であるのが常態ではあるが然し又何れも支那遊歴は常に厭なものと思つて居るかと思ふと、それは疑問である。所謂開港場の租界地であるとか。公使館區域の交民巷であるとか云ふやうな文明地域を視察したり、又汽車汽船の文明利器のみを使つて旅行すると云ふ風にすればさしたる困難には固より遭遇しないで済むのである。又實際趣味に終始して見たいと云ふ考へであつても時日その他の都合で止むなく文明式の方法を採る必要のあることもある。

もと支那人の國民性には保守的氣分の牢固として抜く可からざるものがあり、又夫と正反對に

急進的に新しき文明を採用せんとする氣分の著しく現れて居るものがある。時にはそれが全く矛盾の觀を呈してゐる。けれどもその動機は保守、急進共にその善と認むるものを執つて居るものと見られるのである。尤も其衣食住の如きものは、泰西の文明に似合つて居る點が多いのであるから夫れが採用され易いと云ふ關係もあるので、支那社會には時に極めて程度の低き文化の見えて居る所に、同時に歐米最新の高度の文化を見ると云ふやうなことがある。

今例を交通機關に採つて云つて見ると、租界、交民巷並に北京前門あたりに通つてゐる車は舊來の儘の一輪推車のキーキー苦力に推されて行つて居るのがあるかと思へば、人車があつたり、馬車があつたり、又自動車の去來も中々頻繁で此の頃は電車も出來たのである。その間には驢馬も來れば又時には駱駝も來ると云ふ状態である。つまり北京の街は最も進歩した文明式の自動車でも視察が出來れば人車でも推車でも見物される。尙北京の或部分は汽車の窓からも眺められる。唯電車で見物して廻ることだけは北京は出來ない。天津、上海と違ひ未だに城内城外共に線路が布かれて居ない。兎に角北京の自動車の盛況を呈してゐるのは場所柄丈に注目されてゐる。南京にも亦自動車を見た。然し全體で十三臺丈ださうだ。上海あたりでは四千臺以上もあつて東京の現在に比し二倍に達して居るのである。加之上海は道路もよし木道、アスファルト道、石道、

煉瓦道などがある。自分の見た都會で道路は上海租界のと、青島のとが最も宜しいと記憶する。その中石道は支那街に多いが、南方、安徽、江蘇、浙江方面に行くと、道路と云ふ道路は悉くこれである。北方に行くと大道に泥濘の一尺以上もぬかり、雨後は月餘も水が溜つて居て退かない爲、行人の溺死を見たことさへある位である。けれども南北を通じて考へて見ると、都會地の道路は概して宜しい。少くとも我が國の東京の道路以下にはくだるまいと思ふ。

二、驢馬旅行（その一）

支那内地の旅行殊に北京の片田舎を遊歴して廻るには、驢馬を用ふるが最上の法と考へる。一度驢馬の呼吸を覺えると、それから以後は馬車や汽車よりも面白く、支那流の趣味から云ふと、宛も支那の山水を背景に馬上の我が畫中の人となり澄まして徘徊して居るやうな感じがする。も北方の驢馬旅行は南方の民船畫舫等の舟行に比ぶべきものである。支那古來の旅行振は多く其地方々々に向いた方法を探つてゐるのであるが、中には蘇州の如く、あのやうに水運の便が開けてゐると同時に鈴を附けた例の驢馬の使用も中々盛であると云ふやうに、舟馬併用の地方もあるが、概して云ふと南船北馬は支那の實相である。

爰に北馬と云ふ語の内には勿論支那馬車も這入つて居れば駱駝なども含んで居るものと見て差支ない。尙驢馬と馬との合の仔に騾と云ふのがある。こは専ら耕作用として知られ騎馬用でないから別に見なくてはならぬ。さて上記の支那馬車は日本で所謂ガタ馬車よりも更に數等ひどいものであるが、其出入には専ら前方に向つて開き尙其座が更に前に突出てゐる其上に幌が翳しかけてある。されば炎天、酷暑などの時分には覆ひのない驢馬に乗つて行くよりも此幌馬車による方がよい。併し本來ガタ馬車であるから乗り心地の至つて悪いことは云ふ迄もないことで、ともすれば田舎路の險惡なところにかゝるときは激しい動搖の爲にいつ何時前に、横に投出されて了ふか判らぬ。兎に角餘り愉快なものとはいへない。次に駱駝は蒙古路に行つて見ると幾らでも隊を組んで悠々と例の長い頸で調子を取りつゝ歩いてゐる、北京城壁の下や、瑠璃廠あたりまでもはるばる蒙古からの駱公が列んで這入つて來ることがある。萬里の長城から居庸關あたりを訪ねた時には試みに駱公の背の瘤の間に跨つて見たいなど一度ならず思つたこともあつたが遂に其意を果さなかつた。何分にも夏向きになると駱公は全身毛が長く伸びる。それに蒙古風の持つて來た塵埃其他の土芥で以て灰を降りかけたやうになる。それが雨水や身から出た汗と混じあつて不潔さ加減は名狀すべからずである。長城の外内「駝店」と云ふがそこ、にあつて、其大棚小棚の

内には駱公が躊躇つてゐる、ドロノオル、張家口方面の物資の運搬は一部汽車便によるとしても尙多くは此駱公の恩澤によるのである。かやうに蒙古路には駱駝を用ふことが今でも多いやうである。けれども自分共のやうな遊歴の目的を持てるものには、小さくて敏捷な驢馬を驅る方が萬事に便利である。

北京から一日がけて近郊を廻ると云ふやうな場合には、これ亦驢馬を用ひるに限る。城内を西直門から乗出して萬壽山、玉泉山を見、西山に出でて臥佛寺、碧雲寺、香山へと山麓の名所舊蹟を次から次へと訪ねて廻る時なども驢馬がいゝ。溪谷であらうと阪路であらうと悪からうと狭からうと少しも頓着しない。或は又北京から京張鐵路で南口まで行き其南口から下車して明の十三陵に往復し或は陵の境内を正面の牌樓から石人、石馬、華表の處を過ぎ、長陵、永陵、景陵、思陵へと巡訪し、それから桃林の幽境に出で歸る迄の路と云ふ路、すべてこれらも驢馬で往復するが最も賢い方法である、馬方は居なくても驢公はチャンと其路を心得て居る。時には乗り手の心を解せず意地張るやうなことがあるが、鞭を使はず、尻穗の付け邊りを優しく撫で、やると、驢馬から愚弄されるやうなこともなく、驢馬と人間との間に一種の意思の疏通が成立つ。此呼吸さへ呑込めば日暮て路遠く、心細いやうな場合でも、星の明りで驢公は其慣れた路をさも自信あるやうな歩調子で進行する。現に自分共十三陵の歸途、行き暮て南口の故里陵墓の邊りに出て來る時殆ど間違ふことなく無事歸館することが出來た。自分は支那旅行の毎度に驢馬を用ひてゐるが驢は人の噂に似ず溫和で且調法な家畜である。都合では一匹位は日本へ連れて歸朝して見たらどうかと思つた程である。

三、驢馬旅行 (その二)

驢馬は輕快なのと機敏なのと取扱ひ易いのと安値なのと其他色々の點から自分は驢公の肩を持つのであるが、特に根氣のよいことは驚くべき程である。ところが實際また之に附いてゐる馬方に至つては驢公以上の根氣を有し何處までもくつゝいて來る。支那の内地に這入ると乞食體の賤民が支那の四里も五里も追從して來て老爺老爺(檀那樣々々)と云つて手を突き出しながら錢を乞ふ。中には八里でも十里でも追つ駈けて來るのがある。試みに銅子兒トウシイの一枚か二枚かを投げてやると、それを拾ふたらそれから又外の乞食が同じやうについて來る。驢馬屋はこの物貰ひとは動機を異にするがその根氣のよいと云ふ點は同じことで支那人の一特性を現はしてゐる。

又驢馬屋相互間の競争の激烈なることも驚くべきもので、驢馬の群衆せる所であれば常に見ら

れる現象であるが、北京郊外萬壽山で自分はひどい目に遇つたことがある。一日北京大學の馱方君と一緒に西山方面へ出掛けるべく先づ萬壽山に遊んだ。仁壽殿、佛香閣、廻廊、昆明湖、銅牛など巡覽を了へて後の山をひと廻りし、それから兵隊の銃剣で衛つて居る門即ち萬壽山の出入口を出たのであつた。門の前には餘程廣い廣場がある。自分共はこゝに出て先づ玉泉山の天下第一泉ともいふ水晶のやうな珍しい神泉を見たり、又碧雲寺、臥佛寺など山手の方の古寺に行つて見ようと思つて居た。ところがどちらから押し寄せて來たか。來るも來るも非常な驢馬の群で、その數無慮四五百頭。自分共は圖らずもこゝに驢公の密集包圍攻撃を受けたのである。羊の群や鷺の群なれば諸地方で出くはしたこともあるが、驢馬の群には全く閉口した。右にも左にも、みつしり立錐の地なき迄に籠み合つてるのであるから全然身動きもならぬ始末であつた。携へて居るステツキを振り揚げて見ても威しがきかぬ。それもその筈である。ぶちなぐられても構はぬ。一途にたゞ客を横取りしようといふ馬方がその四五百頭の驢馬に一々附いて居るのであるからである。客を呼ぶ爲め我れ勝に、群を擠し退け、懸命に押し懸けるので、その混雑さ加減は筆紙で盡せない。驢馬の頸につけて居る鈴をジャラン、ジャランと鳴らして驢馬屋銘々に驢馬の自慢を始める。曰く自分の馬は若くて健脚である。曰くこの驢馬のやうな鞍の美しいのは他にない。曰く

西山を一巡して北京西直門迄いくらくで行く。曰く何、曰く何と大變な騒ぎである。自分はどれでも構はない手當り次第のものに跨がつて見ようとすけれども、鞍に手を掛け馬上にあがらうとするとそれすらが中々容易でない。本當に動けないのであるから仕方がない。止むなく非常手段に出で、杖で手の届く限り振り廻して見たが身動きの出來ぬことは同様である。依つてとうとう一番丈の高い項羽式の容貌をして居る馬方に、ニテリユ儼然驢にいくらで乗るからと約束し、厭が應でも群集を退かせ一方の血路を開くことが出來た。

馬方は皆鞭ぐらゐは所持して居たが、兇器を持つて居るものは居なかつたから、別段何事もなく唯苦しかつた位のことと済んだのである。日本では到底經驗し得ないことであるが支那では之が少しく名所舊蹟らしい所に行くに常態であるらしい。兎も角旅行者は群驢の包圍攻撃を食ふことは覺悟してゐなくてはならぬのである。

四、驢馬旅行（その三）

床しき支那内地旅行に因み、自分は極力驢公の徳を頌したいと思ふのである。殊に旅の路連々に往々老子然たる農夫の之も驢馬で行くのに一緒になつて行く時などは、自分共は宛ら畫中の人

となつて古代支那の里閭の境を徘徊して居るやうな感じがする。案ずるに驢公は古くは儀禮の郷射禮鄭註に見え初めて居るのが一番古いところで經傳には餘り見えて居ない。其他後漢說文字解に似し馬長耳といふ説明つきで驢のことが見えてゐたり、又後漢書に「驢輦」の話が出てゐたりなどするので大分其存在が明瞭になつて居る。然し驢馬は騾、驘、驢、驢など、共に元は皆匈奴の奇畜であつて、中國未_レ有など、朱駿聲がいつて居る。

今日の學問上からでも動物分布の研究上又言語學上世界の『馬』は其原産地が北蒙古で原語はモリンと呼んでゐたこと迄が明かにされてゐることから考へて見ると其塞外匈奴の地に發して居ると見るのは正鵠を得て居る説だと思ふ。従つて之が支那でも北部に多くて中部に減じ漸次南するに従つて分布の上で之が亡くなつて居るのも其道理であると思はれる。然し茲に自分は驢公に就き三つの聯想がある。其一は食料としての驢肉のことである。牛、羊、豕の三者のことは古來太牢の御馳走を形成せる材料であつて、今茲にいふを要しないし又犬の肉のことも所謂羊頭狗肉の狗肉で古來周知のことである。所が更に世俗の實際を探つて見ると驢公の肉をも食料に供せられ、田舎地方や都會地でも路次の露店などで長時間煮沸して賣つて居るものには、豚肉と稱して支那式のサクラ肉を齧いで居ると云ふことである。或は細かく刻んで驢肉の肉饅頭にして賣つてゐる

こともある、味つて見たことがないから其比較話は出來ないが、北支那から滿洲地方にかけては之が大分用ひられて居る様子である。或は苦力の分布と大體似た分布を採つてゐるものかとも想像される。生きてはあれ程までにひどくこき使はれ、死しては又肉が食料となる、何れ肉は硬いであらうが然し其よく人間の爲にどこ迄も役に立つてゐる動物である哉と思つて見ると一層可憐な情が起る、其二は驢公の嘶きのどこ迄も亡國的なることである。

旅行中田舎の農家のはづれなどで、木蔭の下又は泥の溜水のそばなどで驢馬の一頭二頭の寂しげに綱で括られてゐる傍を屢々過ぎることがあるが、ともすれば、自分共の行き過ぎたあとで驢公の一種謂ふべからざる憐れつぽい調子で幾度か鳴くことがある。驢公の頸は長さが可成りあるから、のど笛の底の方からでも聲を絞り出してゐるかのやうに響く。其聞える距離が遠くなればなる程一層物の哀れを催させるのであるが、わけて時刻が暮色蒼然たる頃に遠山の麓の宿であるとか又限りなき大陸的の平原のうちで之が悲鳴を聞かされる時は最も亡國的の感じを深くする。支那老大國の田舎の氣分と驢馬の鳴聲とは好個の調和を得て居るものと信ずる。支那人自身は之を何と感ずるか。日本人で之を経験したものは誰しも之を雅趣とは感受しない。支那に向つては氣の毒ながら全く亡國的の自然の聲としか聞えない。其三は驢馬の精力殊に驢倫を敦うせる行爲

の熾なることである。先年初夏の候、明の十三陵参詣の爲自分は案内者と俱に驢馬で出掛けて行つた。大理石の舗道にさしかゝつた頃は大分照りつけられて、體もとろけん許り暖かくなつた。案内者も驢馬で二、三間先を歩いてゐる。やがて自分の乗跨つてゐる驢公の足並がやゝ鈍つて来たやうだと思ふが速いか乗手の手前も構はず當方の驢公は前なる驢公を目がけて驀地に一種の衝動を開始した。無粋の自分は其時はまだ其れと氣附かなかつたのである。遂に手に執つてゐる手綱も放さなくてはならぬやうになり、形勢頗る急になつて来たことを知つた。自分は驢公から出し抜かれたトタン後ろに落され大理石上に直立の態となつた。案内者の方も亦降りなければならぬやうになつた。驢馬屋は經驗のつんだもので形勢を取て取つて、逸はやく現場に駆け参じ我々二人を傍觀せしめて遂に事を未然に遮り結局巧に引分けの功を収めることが出来た。驢公如何に精力絶倫と雖も若し驢倫を敦うせしめなば、其日は人氣なき陵下に野宿しなくてはならぬことになる。南口の驛まで人を乗せて歸る丈の活動力は出なくなるのであるからと云ふ馬方の説明を聞き、そこで始めて未然に功を収むる方法をとつた譯が了解せられた。加之、書物の上に所謂獸慾の語も此度の十三陵での活劇によつて始めて徹底的にたしかめることが出来たのである。その翌夜に入り北京城内に歸り珍談の一伍一什を友人の間に卓上の土産話として話したところが何れも

捧腹絶倒の態で今日尙面々の間に驢馬式の語が同士の笑話になつてゐるやうである。

五、護衛附内地旅行の真相

支那内地で鐵道沿線から大分遠ざかつた僻陬の地に分け入るには、出来得る限り身に束縛を受けないやうにして出掛けるに限る。束縛とは領事館と支那官憲とからの保障と云ふ格で旅行免狀即ち護照と云ふものを受けることを云ふのである。支那内地の不便の地に踏み込まなくては實際の支那の生活は味はゝれないが、其代り如何なる不慮の災害危険に遭遇するか判らぬ。若し萬一旅行中所持せる財囊を奪はれて深い谷底に突き落されて了へばそれ迄であるがそれ程の程度に至らぬ場合で若し危害の來る虞がある時には有がたいことに早速護照と云ふものが物を云ふのである。運悪く慘殺されても護照さへ持つて居れば時によつては國際問題にすることも出来る。それ故片田舎に出掛けるには支那銀の二、三弗位は拂つても之を下げて貰つて置く方が安全と云へば安全である。

然し事實の上では斯かる形式にはよらず出来ることなら廣東人などになり済まして護照なしに遊歴して見たいのである。文化の真相は土民の不用意の間に見える。之を探つて見る爲めには此

の方法によるべきである。而し又それだけでなく東洋人として里閭から里閭へ渡つて廻る場合に人情に變りはないのだから、眞心から親切に、そして策略なしにやつてゐれば何等氣をもむこともないのである。それで尙誤解を招くことがあれば一應旅行の目的でも説明すれば澤山である。つまり護照なしで眞心本位に巡遊してゐれば先づ大丈夫である。之が束縛のない方法である。かくの如き態度で隨處々々の人々に接してゐれば、日本の田舎を旅行してゐる氣持と差したる違ひはない。夜間に入り自分の泊つてゐる里閭の入口のことを考へ城門のことなどを思ひ出したりなどする時は異境の旅行が何となく寂しく感ぜられ、夜半目を覺して貴重品の所在を思ひ出したりなどする時には、不圖自分は四面楚歌の聲こそ聞かないけれども、油斷は出來ぬものぞとばかり心を締め直すやうなことが往々ある。けれども實際は大抵晝間の疲れでぐつすり熟睡して了ふ。

かくの如く何等心に蟠りなく巡遊をしてゐても、ともすれば城門街中などで訊問を受けることがある。嘗て山東省濟南の商埠で商家の檐並、門聯の句の頗る名句至言の多いのを見たから、辻に立つてあたりの聯句をバノラマ帖に書き取つてゐた。檐下を覗いては書き、書いては覗いてゐたので銃劍で辻々を警備してゐた支那兵がけけんな顔をして近づいて來た。何を書き取つてゐるのかと訊問に及ぶ。何を偽らう書き取つた全部をすぐ面前に見せて説明してやつたが承知しな

い。近所の南紙店につれて行き筆紙を店主に出させて國名、姓名、身許を自署せよと迫る。判らぬ兵士に拒んで見た處で面倒を重ねる許りだと思つたから十分に書いて示してやり且明日以後は曲阜、泰安、泰山に行く目的で東洋から孔孟を慕つて來たのだ。勿論孔夫子の墓にも參拜する考へだと有りの儘語つてやつた。曲阜行の火輪車の話を交はず迄になつて別れた次第であつた。又安徽歙州入りの時は揚子江を日清汽船大貞丸で南京下關、浦口、蕪湖へと廻り大通で上陸する。其の時は夜十二時であつた。南京領事代理清野長太郎氏の肝煎で安武軍の第八路第三營第四哨中隊長王雨田以下十一名が埠頭に提灯をつけて出迎へに來てくれてゐる。東洋文學士閣下の遊歴中は護衛の任に當るのだと云ふ。連中の旅費はすべて請合仕事で、隊長が貰つて來てゐるのだからそれはこちらへ明かす必要がないのである。こちらもそれを聞く丈野暮で、宿と日當とは慣例上持つてやることに定つてゐる。

こゝに特筆すべきことは次の一事である。入唐の文學士は地圖を引きに來たものでないか。鐵鑛や銅鑛を採りに來たのでないか。口に無邪氣なことを言つて其の實内命を帯びて遙々渡つて來たものでないかと見てゐたことである。それも其筈で色々氣の付くことがあつて、例へば周代に見える亭舎の梯が山間の片田舎に窺はれたり、古の君子が庖廚を遠ざけてゐた所以の理が悟られ

たり、中醫の建築が山間の古廟に見えたりなどする時は隨時兵隊のそばで手帳に書きとつてゐたことがあつた。又硯材の美質を見ては細羅紋や卵石羅紋の鮮かなのを拾ひ、金星（硫化銅）の含まれた黒龍尾質のものが目につくと嬉しさうに岩層から之を割つて提籠に拾ひ入れたりなどしたことがあつた。其爲でもあらう文字の知識などは俗用略字位しか知らぬ兵隊共であつたが一行が客棧に着いてからと言ふ者は彼等は宿主とぐるになつたり、道中の民家で傍若無人の行を敢てしたり、それから護衛してゐる東洋の旅客をば礦山技師だと心得てゐるやうなところなど中々抜目がないやうであつた。夜半カンテラの下で日記をつけてゐる自分の室に這入つて來ては、まだ寝ないのかなど挨拶しながら人の手帳を検したりなどする。けれども自分は手帳などは好きな通り見るにまかせてやる。全く元來の觸れ出しが護衛とは名のみで實は監視の爲に安武軍から遣はされたのでないかと思はれた位であつた、然し自分は公明正大で何等表裏はない。自分の支那旅行は文事學事を事としてゐるのだと云つて見た所で仕方がないから、納得するやう事實のまゝを見せて置いた。石埭揚梗田黥縣シイティヤンカンチンイシヤンの旅行はすべて兵隊共を朋友として了つた。因に護照の有効期限は滿一年であるが今回の旅行には殆ど之がなくても宜しかつた位であつた。

六、支那人の心に映じた日本人

戦後の日本は隣國としての支那並に支那人の特性をば從來の如く雲煙過眼視して居る譯には行かなくなつた、支那の現代文化の取調は實地現場に踏み込んで行つて親しく見もし聞きもし、そして出来る丈事實の真相を突きとめることに努力しなくてはならぬ、されば……に叙べた文化方面の記述は國民性研究の大局の上からは一小部分に過ぎない。衣食住の考へや年中行事、冠婚葬祭、迷信、教育、文藝、學術のことなどに就ても所謂漢籍所載のこと以外に之を離れて注目すべきことが尙多々ある。けれども上述文化各般の記事からして支那人の少くとも自分が支那各地で接觸した丈の支那人の心理状態に確に了解されたこと、信ずる。

今日の支那人の心理状態は、之を一國民の資格としての立場から批判する時は、色々の缺點や幼稚なことのみに續出する。然し今若し之を支那社會の人民と云ふ方から見るとは多くの美點を認め又其社會的に發達して來た種々の現象を認める、殊に支那人を個人として見る時には見上げたもので彼等は毎日徹底した生活を營み且誠に要領を得た人生觀を有してゐるのでないかと思はれる。支那人の心は全く萬事に兩極端の作用が活いて居るのである。其何事にまれ兩面の使ひ分

けのあることは既に云つた通りであるが、尙また非常に慾張りこぢり合ひ時には極めて微妙な所迄も氣を廻して來ると云ふやうなことがあるかと思ふと、此度は非常に鷹揚で大慾は無慾の如しと云はれては居るが殆ど全く私心とか公利とか云ふ考への見えてゐないやうなことがある。然し平均して支那人一般の社會的日常生活を見ると自覺はしてゐないのであらうが實に徹底したものである。形式名目の如き外部の標榜するものは極端に嚴重であるが其實際の裏面は要領よく徹底した方法を探つて居る。支那人は文言の上で「清貧」に安んず。挂冠後、野に下つて清貧に甘んじ云々など、云ふ。唐宋の世には殊にそれが多かつたやうだが、支那では清貧と云ふ表面上の語を常套語として用ひて居る。千人中に一人位は清貧を標榜する者の中に、文字通り清貧の暮しをして居る士君子も居るのであらう。然し事實は清貧とは士君子が處世上の手として用ひて居る文言である。その心して讀まなければならぬ慣用語であるに拘はらず、清廉、無一物で支那の士君子の文言に欺され清貧の跡を追ふやうなことをしたならば妻子眷屬がやりきれなくなつて來る。

然し翻つてその生活振りを考へて見ると一般に支那人の家には日本の様に全く餘計のものと云ふものはない。家屋の構造の上から云つても押入棚などはない。襖か又は櫃の一つ位に何時でも

財を始末し移轉の出来るやうに出來て居る。日本の官吏教員は生活難を唱へながら體面と世間體に氣兼ねして着物と洋服、羽織と外套下駄と靴を購ひ、總て二重の冗費をかけることを敢てして居る。日本の社會では不徹底な世間並の權威に壓せられて心ならずも不相應な浪費をして居る、雨中の東京で泥路の中を勤め人共の、洋服に高足駄を穿き得る時代の來ることは餘程前途遼遠である一事に思ひ比べる時は未だ貧のどん底までには大分距離がある。日本の清貧にも未だ餘裕が大にある。従つて生活難問題は徹底しないことになる。若し支那人が此問題に際會したならば氣兼ねなどしないで徹底した生活振を探ることと信ずる。然し最近木堂翁の直話中に、此節本所邊の貧民町を自動車で通過する友人に大分困つて居るものがある。大道に遊んでゐる子供はブー／＼と音を聞いても少しも退いて呉れない。その爲め徒歩で歩くよりも時間の懸る。子供は脚部位に少々傷を負うて其代り多大の轢き賃を強請する。子供の親の心理がまたさるものであるから仕様ががないのぢや云々と云ふ話があつた。強請を目論見て故意に大道に遊ばせると云ふ考へを見るに至つては東京の人氣も大分徹底した、否、寧ろ支那流に露骨になつて來たものと判定せられる。國民思想の歸嚮統一を圖る問題の如きも、近き將來教育家をして主として其局に當らせることになるであらうが、其教育家自身最早清貧に甘んじ得るの綱が切れさうになつて、既に社會の一方

に容易ならぬ決議の聲を揚げるものがある時代になつて來た。上層を吹く風は下層生活難を訴へてゐる連中の翹望する所のものと没交渉である。精神的優遇法の如きも上流に喜ばれるかも知れぬが下流にはそれ許りでは徹底しない時代になつて來た。清貧も程度問題で世間體を氣兼ねして居られる間はまだよろしい。上下秩序があり、支那と國家社會を異にせることを知れるものには何等心配はいるまいが、支那人から日本を見ると其清貧状態にゐる人々の絶叫が餘程不思議に感ぜられるであらう。

七、支那留學生の渡日

雲南貴州とか蜀の成都重慶とか乃至は昔の長安の都よりも更に遙かに遠い甘肅省の西陲、蘭州邊りからでも支那人は今日續々日本の東京まで留學に來るやうになつた。其の中には自分共と朋友になつたものも随分ある。支那留學生を朋友に有つことは自分共の最大快事の一つである。支那に云つても聽かされなかつた支那の古琴（日本の琴は支那で箏と云つて居る）の弾ける羅紀君の如きは四川の成都から來て東京音樂學校に通學して居た。「平沙落雁」を始め雅曲の彈ぜられる時の興味は何とも云へぬ。獨り羅君に限らず四川なり甘肅なり雲南邊りから出掛けて來る者はひ

と先づ上海、天津、香港の何れかに出るのが順路であるが實はこれ迄來れば日本に來る道の三分の二は來て居る譯である。今は奥の方も大分開けて來たが交通は中々困難で、故竹添井井博士が棧雲峽雨の境の難行をせられた明治七年頃程のことはあるまいが然し内地の檐（荷かつぎ）馬車、推車、驢馬、民船、筏などの不便さ加減を想像して見れば羅紀君其他の留學生諸君の日本渡來の難路の程は全く思ひやられる。歐米へ行く者も日本に渡來する者も港に出て來る迄の困難は同一である譯である。支那學生にはこれ迄氣の毒なこと多かつた。學生自身にも粒のよくないのが多かつた。嘗て湖北省から來て居た少年で黃正濤と云ふ者があつた。年が十五で語學や普通學を修めてゐた。その父親といふのが三十八で駒場の農科大學に獸醫の方をやつてゐるものであつた。支那人には親子諸共とか六十歳以上になつて來るものなど色々ある。日本人には一寸出來ぬことである。子供の黃は偉いもので嘗て其の學校で試験に不合格になつた時のことであつた。先生に向ひ「私二十圓出す、先生僕を二年級にして呉れるか」「いけない一萬圓以下では」とからかふと、私の父親やはり學生よ、一萬持たない、三十圓でどうか」と子供心にも相應にかけ引をする支那流の思想は徹底したものである。少年のあたまが既にこれである。これは嘗て支那人の處で家庭教師をしてゐた友人の憤慨してゐたことを併せ考へると興味がある。

支那人は家庭教師を給料關係で婢僕視する。日本人は憤慨するが、憤慨する支那の先生が生徒の缺席多きを何事も徹底した支那人から見れば此に來るのである。又臺灣などで學校の先生が生徒の缺席多きを氣遣ひ遂には先生自ら生徒の家庭を訪ね病氣に非ざる限り出るやう注意を與へる。すると蔭口が面白い。あのやうに生徒の缺席を懲慥し來たるは収入に關係するからであらうと。先生は官吏であるから心配は御無用の方で全く深切から注意をしたに過ぎなかつたのである。又支那の留學生には此のやうなこともあつた。學校の卒業期まへになると云へば三月の卒業の時は十二月と一月とかになると銘々學校の會計に迫り二箇月分月謝をまけてください。それから免狀を今ください。さうしてくれるならば友達十人この學校に入學させます。損はないでせうと云ふやうな手嚴しい交換條件を持ち出すことさへあつた。

支那の勞働問題

一、宣傳の利器を巧みに利用せよ

支那は社會的方面に驚く可く發達してゐる國である。その工人として紡績職工にせよ、又船着きで働いてゐる碼頭の苦力にせよ、或は土方の手合ひにせよ實によくそのいざ労働問題と云ふ如き秋になると誠によく聯絡のとれた巧みな行動をとるものである。殊にそのうちでも支那人獨得の持ち前である宣傳戰に於て、實に手に入つた鮮やかさを見せる。日本人の如き宣傳の下手な——下手と云ふよりは宣傳を往々にして罪惡視して之を嫌つてゐる——國民は世界でも珍らしいであらうが、支那はその反對に宣傳のことにかけては世界隨一の評がある。

民國十四年の春の支那の労働騒ぎは有名な上海の内外綿に端を發した紡績騒動であつた。この騒ぎの最中に日本側に豊田紡の某技師が、とある暴徒の襲撃の爲めに結局横死の悲運を見た。紡績工人側でも内外の職工「顧正紅」なるものが横死をした。何れもその横死を遂げたことは同一のわけであるがその横死の事實をどこ迄も極度まで十二分に利用し自己の利益擁護の爲めに努力宣傳に宣傳を重ね、遂に支那四百餘州の新聞は固より、日本の新聞、歐米に於ける世界的の新聞に向つて執拗にその顧正紅の名をたねに叫び續けて居た。その結果その死人は大變有名なものとなつた。

なつて了つて非常な有利な地歩を築き上げることになつた。つまり之を人道問題化して天下の同情をひき、之に油を注ぎ血を湧かしめ資本家攻撃の矢を猛烈になす爲めの好材料に使つたのであつた。待つてゐると許りその點に於いて決して抜かりのない、殊に文労働者を煽り立てる位置に立つてゐた學生どもは、得たり賢くしと之を仕事のたねに利用して盛に書き立てゝゐたのであつた。

尙横死せる願正紅は死人に口なしの例に漏れず、自己の親を肯定することの不可能なるが爲め、當時前後かれこれ七人からの親が現はれて来て八釜しく騒いだ。之れは我が子の死を悼むの情と見るよりは他に理由が存してゐたのである。と云ふは始めその横死に對して、工人側は五萬であつたか十萬であつたか大變な慰藉料の要求あつた。結局會社から一萬金と云ふが出たので、それが日本領事館に託し置かれてゐるのに心がむらくと動き、之に狙ひをつけ、われもくくと口八釜しく請求して來た。曰く

「正紅」は自分の愛子である。可哀相なことをした。非業な死を遂げさせたのは誰れだ。」
とたけり叫ぶ。それは總べて願姓を名乗る願某と云ふ人間。自稱の怪しい親である。

「そのやうに一人の死んだ息子に七人の親があつたりなどしては溜るものか」

と云つてやりたい位である。事實戸籍法のない支那のことだから、いくらでも、わしが親ぢやとどなり、十人でも二十人でも出て來得るわけなのである。さうかうするうちにその一人の願爺が黙つてこつそり受取つて發表しなかつたとか云ふ流言蜚語の傳はるや、それが半殺しに袋叩きにされたと云ふ濡れ衣をかけた滑稽な場面まで演じた。それは兎に角として願正紅一人をたねにそれから愛國罷工の、同情罷工のと騒ぎがつゞき他の多くの紡績工まで巻き込み、當時學生青年はその態よく浮ばんとするの資金をどれだけせしめたことか判らぬ。願正紅一人のおかげで實に幾萬のものがその御利益にありつくことが出來たのであつた。

日本の新聞記者や英米のそれまでが支那側から出た特だねを其まゝ、鬼の首でも取つたやうに喜んで打電するものだから益々支那側は大船に乗つた形になる。もとく遊山氣分でやつてゐたのが一層圖に乗つたわけであつた。之に引くらべて日本の豊田紡の方の技師先生の横死はどうなつたか。これは支那側に揉み消されて了つて豊田のとの字を云ふものもない。支那側が冲天の勢で以て自分の方の「願正紅」の名を大にしてやつてゐるに對して日本側はグの音も出ない。あとがこはいと許り恐ろしくて出ないのであつた。工人會に對して堂々と要求がましい事を云出さぬは固よりかれらを責めてすべて之によつて雙方喧嘩兩成敗の帳消しにでもさせたらばと當時自分共

も及ばずながら提言をしたところではなかつたのであるが、どうしても日本人はかやうな時になると壓倒され風靡されて了ふ。結局日本の方は犬死にとなつたわけである。何にせよこれ丈の開きがある。と云ふのはいくら何と云つても支那に於て見ると宣傳で景氣負けがして吞まれて了ふのである。この宣傳の競争をなし宣傳戦に入ると云ふ事は獨り労働の問題の場合ばかりでなく、何によらずいつでも支那にては勝てないのである。過去の事實が何より之を證明してゐるのであるから、今之に反證をいくらあけて見たつて仕方がないのである。寧ろその利器を持つてゐる支那人を當方側に抱き込んで、有利な地歩を作る丈の度量と温情とを始終もつやうに修養をつむことが大切である。支那に投資するものはこの點に理解が出来なくては萬事始まらないのである。

二、支那民衆の心理の理解

南方に出稼きに行く支那労働者乃至は臺灣、日本内地、朝鮮、滿洲の各方面に出かけて行く紡績労働者の様子は支那内地に働いてゐるそれらの手合ひとは殆んど變りはない。

支那ボーイにしても之を使つた経験のあるものはよく判つてゐる如く、實に柔順で使ひ易くさわりがよろしい。缺點も勿論あることはあるが、支那ボーイは氣のきかぬ丈に又よい所もある。

支那労働者も亦そこに缺點はあつても矢張りよい處がある。一概に之を餘りに見縊つた取扱ひをすることは慎むべきことである。その邊は理窟としては何れも判つてゐる。けれども氣持ちに於いて之を動物視し、又之を機械視する傾きがあり。とかく殴つた、殴られないと云ふ殺風景の押し問答が持ち上がるのである。たとひ鐵拳の手は出さぬにしても、心の氣持ちがいつも殴り兼ねない態度でゐては、相手がたの心にそれを感じせしむる許りでなく、やゝもすると反抗的態度に出るやうなことにもなつて了ふ。よしその苦力自身はどうもしなくても、學生とか他の方から承知せぬ。よけいなおせつかいをするやうなことにもなる。現實の問題として多くの苦力を使つて見ると云ふと、どうしても立腹せざるを得ない、癪にさわるものが起つて来る。

筆で呑氣なことを書き評論をしてゐたりするのはちがふ。目に一丁字なき手合ひにしても必ずしも殴らなくてもよい。いくらでも方法はつく。精神的方法があるのである。牛馬でさへも支那ではあまり鞭打たずに之を御して行く方法を知つてゐる。從來支那に投資してゐたものとはかくに機械はかりの研究はやつてゐるが、支那苦力の精神方面は問題にしてゐなかつた。どうでも牛馬同様に行くものだときめてかゝつてゐた。こゝが抑の間違ひの始めである。

支那の労働者は大分進んで來てゐる。殊に船の方の青班の碼頭の苦力だちの方のものは一層進

んで來てゐる。又た年一年と進運に向つても來るであらう。けれどもそのアヴェレージを取つて見ると、まだく全體としての工人、労働者の程度は低い。低いけれども一部分の頭のすゝんだもの、又は學生とか、職業的に煽動を商賣にしてゐるものが焚きつける。いつもそれから知慧をつけられ、それに絲を引かれて操られてゐるのである。殊に支那の工場ではこれが一番恐ろしいのである。これは歐文も讀め話も出来る。漢文は固よりうまく書き、辯舌もまく。これに引かれるのである。かれらはそれで立派な日すぎの出來てゐることは何處も同じ秋の夕ぐれである。支那に投資せる日本の事業家が、いつ迄も單に労働者苦力の方のみを見て、この職業的の人間の方の調べを見てゐない。されば勿論その方へ早く手を廻はして禍を未然に防ぐなど云ふことの緒もまだ講ぜられてゐないかのやうに見えてゐる。

上海で排英排日の最も盛な絶頂にあつたときのことである。少しく早手廻しに米はその方面に巧みに手づるを求め、その元締めに諒解を求める方法を講じてゐたと云ふことである。これあるが故にあのさわぎのとき米に對しては何等のさわぎもなかつた。知らぬ人は之を不思議だと云つてゐるが、事實うまく早く氣がついて渡りをつけてゐたので大變安心が出來てゐたのであつた。支那の労働問題はいつこゝである。少しくその方面に氣をつけて、そしてその要所々に努力

を惜しまないのならば枕を高くしてやすめるのである。單にかれらに對して温情主義ばかりではいかぬ。その急所々々の大事なところに抑へを打つ丈の鋭い用意が、豫め先きに先きにと講ぜられてなくては嘘である。あとの祭りとなるわけである。消極的のことばかりでは結局のところ物足りなくなる。何十年か先きには資本家の方でも眼覺めて來て。自らその騒ぎの起らない先きに未然に之を防ぐ方針を確立し、その労働問題を有利にかれらの爲めに解結してゐる丈の氣持ち、その態度を有してゐることが一層大切であることは勿論である。

支那の土地に出かけて行つてゐると云ふ考を頭腦から失つてはならぬ。支那労働者を煽ることを商賣にしてゐるものは、常に此の日本資本家の弱點につけ込まんとして畫策してゐるのである。この邊の支那民衆の心理を理解なしには労働問題に手を觸れることは全く禁物である。

支那労働問題理解への道程

一、重大視すべき工人背後の外的力

最近支那問題で日本人の頭を最も刺戟して居る問題は、日本の投資家の最も恐るべき痛手を負うて居る紡織會社の罷工事件である。元來外國の土地で而かも勞銀の安く、そして工場を置くに最も適當したる上海并に青島又は安東の如き處に、邦人の紡績事業の基礎が大々的に築かれて居る事は、吾人らの最も愉快とする所である。併し元々外國の土地であつて而も社會的に不安の多い上海、青島に今回の如き不祥事の起ると云ふ事は豫測の出來ない事ではなかつた。安東は事情が違ふけれ共、青島と上海は、幾萬の労働者が居つて、而も其の背後には種々なる不穩の問題を惹起すべき誘惑物がある。世間では普通支那人と云へば、直に附和雷同するもの、様に見て居るが、是は寧ろ日本人などの方に多いのであつて、支那人は比較的冷靜である。冷靜と云ふよりも打算的である。日本人は何か騒ぎが起ると、野次馬許りではなく、正業を持つて居るものまでも自分の爲すべき業務を抛擲して置いて群衆心理に支配され、其の儘出掛けて行く様な事がある。夫れが自分に利益であらうと損であらうとそんな事は眼中に置かない、全く感情の儘に動いて終ふ。所が支那人は自分の業務で得る所の収入を考へ、其の収入よりも打算上で良いとなつたなら

ば夫れを已めて他の群に投ずる事はある。併し良いとも悪いとも判らないものに初めから雷同附和して群衆に加はると云ふ事は先づない。勿論他から強ひられ或は一般に随つておかないと思はざる危険を伴ふと云ふ様な場合には一種の打算から心ならずも随ふ事もある。さう云ふ譯であるから支那の労働者が一致の行動をとつて資本家にたてつくと云ふ様な場合には、是を簡單なる附和雷同と見てしまふ事は出来ない。

今日支那の労働問題は時々頭を擡けて來て居るが、是には海外の思想の影響もあり、又外人の會社で暗に労働者の尻を突つて居ると云ふ様なことも一度ならず聞いて居る。夫れ故、事柄は頗る複雑を加へて來て居るので、此紡績の罷工問題は假令此際賃銀を値上げ或は貯蓄金拂戻しの問題等で、一應の解決が着いたにした所で今後尙幾度か繰返しをやるに違ひない。夫れが慢性になつて來ると始終僅かの事柄の導火線で、非常な結果を齎して來る事になる。勿論問題が起つてから急に之を鎮壓する所の頓服劑を投けると云ふ事も必要であらうが、必ずしも終局の解決法でないのである。故に私は絶えず紡績職工の心理状態を察し、又其の方面から教唆する所の其の外的刺戟に注意を拂はなければなるまいと思ふ。

そして問題の官憲とか、或は工部局邊りなどと平素緊密なる關係を保つてゐる事は必要である

が、併し是れとても平素是等を督勵する様にして來れば兎も角、いざと云ふ時に夫れ程効果のある解決を齎してくれると云ふことは期待が出来ないのである。

二、勃發事件未然の防止

今後此の問題が何の程度迄擴がつて行くか、或は是を如何にすれば根本的に絶滅してしまふことが出来るか。是は恐らく總ての紡績會社の幹部の考慮して居る所であらう。又必ずしも支那人職工を使ふ者ばかりでなく、日本人の従業員を持つて居る資本家に於ても、同様考究して居る事であらう。

之に就ては普通妥協の問題が持ち上るのであらうけれ共、支那一流の妥協と云ふ事は日本人の資本家としては容易に出来得ない事であらうと思ふ。支那人相互の間には暗中摸索なり、權謀術數なり始終ゴツタ返しを繰り返して居るけれ共、一方が日本人であり多數が紡績職工であると云ふ場合は自らそこに變つた方法をとらなければなるまい。無論自分は工場管理法の内容或は工場内の空氣に就て一々具體的の事は知らない、併し乍ら支那人の習慣思想等から考へると、地方的の問題に就ては出来る限り高壓的方法をとらないで、其多數の職工の頭目と目指されて居る

ものを取り出して、之とよく諒解し、之と或る程度迄の協定を圖ると云ふ事が適切な解決法であると思ふ。無論使用人が日本人である場合は、手に取る如く彼等の様子が理解されて居るが、紡績の職工連は、一種の問題になると絶対に秘密を守り、決して仲間の事情を外に洩すと云ふ様な事はない、殆ど一滴の水をも洩さない程度で一致の行動をとるものである。

假りに其の職工の一人を選び出して、種々是に詰問を迫つて見ても云はない事はどこ迄も云はない、そこに一種侵す可らざる確な信念を以て居る様である。遂に殺される事となつても、而も尙ほ夫れを口外しないで、其儘従容として死に就くと云ふ事である。是は如何にも感心すべき性質と思はれる。

夫れ故に多数の支那人を使役する場合には、是を侮蔑し或は見縊つた考へを以て臨むと云ふ事は、抑も間違ひの根元で、こちらで想像をして、其の想像通りを押し付けても、唯々諾々として聞くだらうと決めてかゝると云ふ事が失敗を招いてゐる主な原因となつて居る。

如何に字も讀めない物の勘定も出来ない様な低級な職工であつても、其の仲間の總代、或は頭目と云ふものには良く服従して居る様であるから、其の總代や頭目をこちらに呼んで夫れも一人や二人でなく、少し多勢呼んで、夫等と人情づくで、殊に彼等の顔を立て、所謂面子メンツを立て、や

ると云ふ考への下に、常に話しを進めて行く。さうする場合には、初めは鬼の如き心を持つて居たものでも、さう無理を押し通すと云ふ事はなく、或る程度迄の妥協話しが出来るのである。然るに夫れを奴隷視し、或は軍隊的、高壓的に行かうとなると一時は上下の差別があり、整然たる規律が立つた様に見えて来るがその實腹の底には絶えず破壊のことを考へさせ、感情を激昂せしめて居るのである。それ故其の突發の暁は一時に破裂して非常なことがおこり、幾萬錘の紡績機械を中止させなければならぬ様な事になる。矢張り國は異つて居つても、人情は同じであるから、彼等の心を諒解し、本當に言葉の巧なるものが幹部の中に居て、是が始終精神的の連鎖をとると云ふ事にして居れば勃發的の事件を未然に防ぐ事が出来るであらう。

三、工人との意志の疏通

故に支那人の間でも其の道を以てすれば幾らでも方法がある。爆彈事件の如き非常事を惹き起す前に、何うかすると案外張合の無い位に事件を豫め探知する事も出来るのである。毒殺事件なども支那の上中下各階級に於て始終行はれる事であつて、支那の如く政權の爭奪或は經濟上の鬭争の入り込んだ所では、何時誰が何處でどう云ふ企らみをして居るか、全く想像も及ばないので

ある。社會が複雑に出來、そして始終混雜に混雜を重ねて居る様な上海の町などでは、假令朝鮮の假政府であらうが、或はK・K・Kの結社であらうが、何でも彼でも是を包容してゐる城内にしても、フランスタウンにしても、夫等の隠れたる企みは常に安全に且つ巧妙に實現し得ると云ふので夫等の人々は始終上海に入込んで、そして其餘波が或は青島に行く事もある、上海紡績の罷工の初めは、假令是等の外部から教唆があつたにせよなかつたにせよ、其根本原因はどうも外部でなく、内部から始まつたものらしい。併し私は餘り此處に微に入り細に入つた事情を述べたる事は遠慮したのであるが、要するに日本人は平素支那を見縊つた考へ方をして、紡績職工を易く見て居た傾向がある。其爲に職工に對しては寧ろ好意を以て居たのであるけれども、意志の疏通を缺いて居た點で一種の不満を彼等に與へたのである。

彼等が反抗的行動に出た時に、殴り合ひをしたとかせぬとか云ふ事が問題になつて居るが、紡績會社以外の場合に於ける日本のやり方を見ると、時に握りこぶしが飛ぶと云ふ事は良く見る事である。無論西洋人は夫れ以上の事をやつて居るけれ共、彼等は歐米の場合は泣き寝入りになつて居るが、日本人の場合は直ぐ夫れが反感を惹き起す導火線となる。又是を支那新聞では大々的に書き立てる結果、實際以上に大きく報道されると云つた様な状態が始終サラケ出されて居る。

無論紡績會社では斯の如き無理解な蠻的行動はとられなかつたと思ふけれ共さう云ふ噂の立つと云ふ事は甚だ耻づべき事であると思ふ。

今日は幸に年中行事の如く起つて居る排日騒ぎもなし、又本年の國耻記念日も無事平穩であつた。大體日支間の國際的交誼は試に順調に良く運んで居る。長江筋も殆ど無事であつて日清汽船なども非常な好成绩を舉げて居ると云ふ事である。定めし株主などは喜んで居る事であらうと思つて居ると其の矢先きに斯る不祥事が紡績會社の間に起つたと云ふ事は、全體の空氣をスポイルする事になるので甚だ遺憾な事と思ふ。

四、工人心理の研究とその親しみ

併し之迄日本の投資家が、支那人職工の裏面の心理状態に、餘りに無理解であつたと云ふ事を戒める爲めに、之れ丈の高い月謝を拂つた事になるが、見様によつては之れも仕方がない。寧ろ之を好機會として、今後其の對策を良く考へ、そして從來よりも一層相互間の連絡機關を發達させて成る可く双方が祕密を隠蔽せずに、共通の利害問題に就ては鳩首熟考協議して、そして將來の禍根を除き得る様にし、少くとも問題の勃發する一月なり半月なり前に其の様子を豫知し得る

様な仕掛けをとらん事を希望するのである。

日本人全體から云へば是に依て從來支那人に對する理解が足りなかつた事を自覺せしめ、一つの良い動機を與へて呉れて居る譯であるから、斯う云ふ不祥事の起つた機會に、日本の資本家階級で將來支那に投資しようとする云ふ考へを抱いて居る人は豫め先づ支那の事情を調べ、支那の人情を理解し、支那に對する基礎的知識が出来た上に於て初めて投資すると云ふ順序をとりたいのである。唯支那が勞銀が安いとか、税金が軽いとか云ふ様な事のみで利己的に是を追ふ事をやめて支那でやれば斯くくの危険を伴ふと云ふ事を良く覺悟して、細かく研究して懸らなければならぬ。是迄も機械の調査、或は一般の人事に就ての調べはあつた様であるが、此の絶對多數なる職工の調査、支那勞働者の根本的基礎となつて居る其の精神状態の調査が殆ど出来て居なかつたと云ふ事が如何にも手拔かりであつた。

故に今回は其の虚に乗ぜられた譯であるから是は不祥事ではあるけれども、一般の知識階級の人々は之に依て支那を理解するに一つの新しい事實上の例を提供された譯であつて、支那の苦力問題、勞働者問題、資本家對勞働者の間の社會問題と云ふものが、是によつて一歩々々と研究の緒に就て來る譯であるから、此紡績罷工問題を、雲煙過眠しないでどこ迄も是を日本の海外發展に於ける一つの重要な問題として、經濟學者の注意を促したい。又社會學並に教育家と云ふ様な識者諸君にも大に此の問題に就て練つて貰ひたい。其點に就ては、當事者自身にはヒドク御氣の毒な譯で大に同情を表すが、是が斯る問題の材料となる良い實際的の例を提供してくれたと云ふ點に就ては、吾人は寧ろ禍を轉じて行く意味に於て、良い機會を見出したことと思ふのである。

問題は違ふが日本人は支那の戦争或は排日或は紡績罷工と云つた様な問題が勃發した時に於てのみ支那が一般讀者に紹介されて行き而して此等の事件の殆どなかつた時の支那は、如何に平穩であるか又た上海青島以外の支那は、今日如何に香氣なる生活を住民達が送つて居るかと思ふことに就ては何等の報道がない。

支那に居る日本の新聞記者は絶えず事あれかしに待ち構へて居つて、何か目覺しい事件があれば馬力をかけて大きく是を日本に報道しようとする。それ故に支那に就て何等の知識のないものは支那全體が同盟罷工をし支那全體が戦争になり支那の國を擧げて排日をやつて居る様にとれる心配がある。自分の様に二十回以上も支那に渡つたものから見れば此等の大活字を以て紹介された事件は、支那全局にとつては九牛の一毛にも値しない小さなものであると思ふにも拘らず是を

日本の識者は大問題視して騒ぎ立てる、そして會社の社長も重役も監査役も總出で出掛けて、其の事情を探り真相を見ようとする。是は事業家としてはさもあるべきで、當然なことであらうが、支那の大きな舞臺から云へばなんと見るべきか、殆ど自分に之を口にすることも耻づかしく思ふのである。

斯う云ふ譯で平素平和なる又穩かなる、そして日本人に安全を與へ、又日本人と親しみの情を加へてゐる支那の細やかなる場面、さう云つた平和の舞臺が一つも日本に紹介されず、又其事を日本の新聞記者が之を報道しようともせず、本社も要求しないと云ふ有様であつて、偶々起つた此等の殺氣を帯びた不祥事のみがさも常習犯の如くに悪し様に日本の讀書界に報道されて居ると云ふ事は、誠に遺憾なる點で、吾々は東洋全局の平和の爲めに、又日支間相互の爲に大に惜しい事と思ふ次第である。

支那社會の真相

一、支那社會の內面的攷察

日本人の中には、支那の社會の内部は論語其他の經書から道德づくめに考へて居る人がある。或は新聞の電報通信に依て支那に戦争、支那の政治的の争ひ、又は排日等から支那の社會を考へて居るものもある。又二十も三十も皿のある支那料理や、第二夫人第三夫人等の實際を見て、之が支那社會であると云ふ様に考へるものもある。併し此等は皆支那の社會の上面許りから見た考へである。我國では北滿ハルビンから漢口迄短時間で汽車旅行して來た様な人々でも、神戸や長崎に著けば忽ち新聞記者の訪問に對して抑も支那は云々と俄作りの名論を吐くのである。話すものも話すものだが聞くものも聞くものである。斯う云ふ風に支那に對する考のお粗末では對支外交の甘くないかないのも、支那に對する教化の徹底しないのも誠に當然であると云はなければならぬ。實に今日の我國の學者、政治家、教育家、實業家、新聞記者等の支那に對する態度の案外なるには驚くの外は無い。其の因つて來る所の原因は斯うである。我國民はヨーロッパの事情を研究すると偉いと思ひ、西洋人と話してもすると敬服して居るが、支那や東洋の事を研究して居るものは古臭いとして輕蔑し、物好きの閑人の業の如くに考へる。そして支那人と交際するものを見

れば、何んだチヤンなんかと云つて蔑視するといふ状態である。そこで支那社會の内部の研究といふものは、歐米入より非常に遅れ、其の内部の實情は、之を知る人も少なく、未だ日本の文獻にも見えて居らないと云ふ有様である。勿論支那群書を讀んで之を紹介したものはあるが、實際上の支那を見てそしてその臭ひを書いたものは少い。論語は社會をうまく導く爲に書かれた言葉を集めたもので、支那の社會相を書いたものではない。謂はゞ臭い支那の社會に蓋をした様なものである。昔から支那人は如何に利慾に敏い國民であつたかの一例を擧げて見ると、賢人の「賢」と云ふ字其ものからして、既に金を作ると云ふ事を表して居る。即ち下の貝の字は昔の支那の貨幣の事であつて、貨幣即ち財産を作る事の出来ぬものは、賢人の資格がなかつたのである。故に論語や孟子に仁を説いて居るからと云つて、天れを表面から受け入れて昔の支那人は斯う云ふのであつたらうと推測する事は出来ない。さう云ふ譯で支那の社會の内部は殆ど日本人の想像の外である。

支那社會内部の特色は、社交的生活に富んで居る事で、支那人位人を外らさないものはない。總ての人皆兄弟だと云ふ氣持が徹底的に行はれて居る。往年日本人が震災で苦しんで居た時には彼等は日本の經濟の状態を何とかしなければならぬと、純なる心を以て、多くのピラを作つて寄

附金を集めてくれた。慾張で他人を騙して餘計な利得を得るのが支那人の特性であるかの様に考へて居る日本人が多いが、さう云ふものは支那人でも品の悪い極めて少數の人である。斯う云ふ誤解を日本人がして居る事は、支那人の最も殘念がる所である。嘗て支那公使館員の一人が私の家庭に来て話した事は「青島を返して貰つたとか、關東州を返して貰はうとか云ふのは支那人の輿論ではない。夫れよりも何時どの支那人が日本に来て支那人をチヤンコロ扱ひにしないと云ふ事を一番望むのである。青島の返還よりも其の方がどの位良いかも知れない。日本人は西洋人にチヤホヤし乍ら、支那人を馬鹿にして居るのは甚だしい事大主義である。大和民族の武士道は弱きを扶け強きを挫く仁俠の精神であると聞いて居たが、之では嘘としか思はれない」と云つて居た。成程彼等の云ふ如く日本人はひどい。私が嘗て九州大學に行つた時である、此學校の小使は支那服を着て居た私を支那人と思つて、「入つてはならぬ、歸れ」と云つた。私は學長の美濃部達吉氏から講義を頼まれたから來たのだと云ふと彼等は急に平身低頭して案内した。斯う云ふ事を繰返してゐるやうでは將來の日本人に爲めにならない事だと思ふ。如何に口先で支那人に宣傳して見ても、腹の底に支那人を馬鹿にして居る心があつては、そんな事は何にもならない。

二、支那は國家としては望みが薄い

支那の社會は内部が非常に深刻味を帯びて居る、之に反し日本の社會は薄つ片で虚偽が多い。例へば、欲しければ欲しいと云へばよいのに腹の中では欲しくても決して欲しいとは云はない。支那人は欲しい時には欲しいと云ひ、嫌な時には人に與へない。だから辭退してしまつた後で心残りのする事はない。又支那の社會は國家からは全く絶縁状態となつて居る。支那は國家として團結するには少し廣過ぎる。秦の始皇帝や、漢の高祖や、清の乾隆帝等は支那全土を一統したと云はれて居るが、これも歴史の表面丈であつて、地方々々を細かく見れば、叛逆者や歸服しない者が到る處にあつたに違ひない。實に支那人の實情を見ると、國家本位を超越して四億三千六百萬の者は、悉く社會本位で結ばれて居る。支那の國家組織は三百年も経てば壊れてしまふが、支那の社會は何時迄も續いてゐる。既に國で無いものを國であると思ふから、列國は關稅會議に代表者を出したりなどしたのであるが、支那の社會の内部は歐米人の心を以て律する事は出来ない。況んや日本人の心を以て判斷すれば百發百はづれである。支那は社會として非常な強みを持つてゐるが、國家としては全く落第である。支那の社會は不潔である、併し支那の社會のシステム及

制裁などは實に立派に出來て居る。それを拵へるには支那は今迄に五千年の年數をかけて居る。故に支那にはいくら赤化思想が入つて來ても赤化するやうな事はあるまい。海山千年の支那の社會であるから十二三の子供迄も中々よくマセて居る。一例を挙げると日本に來て居る支那の留學生の中には、試験を受けて落第しさうになると、教師とか學校の當局とかを訪れて百圓とか二百圓とかの金を出し、「金を取つて置いた方が良いでせう。私を卒業させてくれれば、私は尙郷里の方から澤山の留學生を連れてくる」と云つたやうなことを云ふのである。斯う云ふ考へは總ての支那學生に共通であるとも見ても差支あるまいと思ふ。

社會の内部はとても想像がつかない。腐敗して居ると云へば云へる。しかし月でも眺めて悠々自適してゐられる國である。日本の歌に「何をくよく／＼川端柳」と云ふのがあるが、支那人の心理は全く是である。夫れだから支那を對手に外交談判を持ちかければ、彼等は何時迄も放つて置いて對手にシビルを切らせる、夫れで氣に喰はなかつたら攻めて來るが良い、手應へがなくてつまらなかつたら引き上げるが良いと云ふのである。斯う云ふ支那人であるから青島や關東州を歸したからとて喜びはしない。支那の一地方の排日を見て躍起となつて心配するのは日本人であつて、支那人の排日は夫程の眞劍味を帯びたものではない。日本始め列國は國家でない支那を國

家として見てゐるから支那人の心の中が判らぬのである。支那人と云ふものは自分の國をロシアが取らうがイギリスが取らうが構はない。夫れは恰度麥稈帽子を冠らうが中折帽子を冠らうが構はないと云ふ様な氣持である。夫れだから列國は其のつもりでかゝらなければ馬鹿を見る。其の點はアメリカの方が日本人よりもよく支那人心理を知つて居る。アメリカの次に判つて居るのはイギリスである。然るに日本では、歐米に對する事さへうまくやれば良い。支那人位何でもないと云ふ氣持になつて居る。之は誠に不都合な事である。

支那の社會の内部はそれでゐて中々謎の如き深刻味を持つて居る。支那の時局はゴタ／＼紛糾して來て居るが、之は政府其ものに威嚴がないからである。威嚴を持たせやうとするには地方の金を集めなければならぬが、其の金を集める事は容易な事ではない。先づ支那の政府は東京の市役所位の力もないと云ふ有様で、執達吏が來ればイクラか握らせれば何も云はずに歸つて行つてしまふ。軍隊を向けると云つた所で總司令と妥協すれば仕方がない。斯う云ふので支那の社會には一面に宗教も道徳も倫理もあつたものではない。倫理だ道徳だと云ふのは紙の上の事か、又は後世に名を遺さうとする時に御用學者に書かせて置く時のみ用ふる言葉である、と見られるのである。

日本でに新聞以外に支那を知る機會が無い爲めに、國民軍がどうしたとか、直隸派がどうしたとか云ふ様な事ばかり聞かされて居る事は、支那全體の社會の上からは極めて小さい事である。支那の大部分のものは戦争や政争から超越して居る平凡と云へば平凡であつて、恰も太古の民の如き生活を繰返して居る。然らば社會の秩序を維持するにはどうするかと云へば、大した金持もないから物もとられない、取れば直ぐ判るから返せと云へば直ぐ返す、返してしまへば平常通りに又交際をしてゐる。私が或時巡查と同行した時に、私の財布が紛失して了つたので色々詮索したが出なかつた。汽車に乗る時に注意して見て居ると、巡查の持つて居る財布が私の紛失したもののので、夫は僕の財布ではないかと聞くと、ウムさうだと云ふ。アンなに昨晚から探して居るのに酷いではないかと云へば、「それでは返さう」と云つて返した切りで、悪かつたとも何とも云はない。シャー／＼したものである。又それ程悪い事をしたと云ふ様な風もない。之は要するに彼等の社會がかう云ふ風に作られてゐるのであるから、直に之を個々の人々の罪に歸して憎む事は出来ない、日本人の様な簡單な一徹の考へから見れば、支那社會の國家は徹頭徹尾複雑で全く要領を得ないもの許りであるとも云ひ得られるのである。

三、明るみに出た社會相の數々

七九八

支那には地方々々に土豪が澤山ある。一町四方、二町四方、或は三町四方と云ふ様な廣大なる邸宅を構へて、周圍は樹木に掩はれ、中に物見櫓が聳えて居る。そして其の邸の塀垣は天日で乾かした煉瓦で取り圍まれて居る。南支那の土豪は多くは山の高い所や突き立つた岩の上に邸宅を構へて居る。土豪の主人公が緑の轎子に乗つて外出する。土匪が外で待つて居て忽ち主人公を奪ひ去つて、其の山を越え谷を渡つてどこかへ伴れて行く。さうしておいて、其の仲間が土豪の留守宅に行つて白々しく主人公はもう歸りましたかと聞く「まだ歸らない」と云ふと「さうでせう、こちらの主人公は僕の方の山寨に連れて行かれて居る。十萬圓か十五萬圓持つて來れば歸してやる」と云つてサツサと歸つてしまふ。けれ共若しも金を持つて行かない時には、次には主人の指を切つてそれを板の上に乗せて持つて來る。そして「此の指に覚えはないか、まだ金を持つて來なければ足を切つて持つて來るぞ、可哀想だと思ふなら早く金を持つて來い」と云つて歸つて行く。それだから無理矢理にでも金を拵へて持つて行かなければならぬ。かう云ふ事は如何にも野蠻極まる行爲ではあるけれ共一面から見れば支那の現状に於ては知らず識らず社會政策が行はれて

來るのである。即ち萬民の膏血を絞つて金を貯へた富豪等は、結局土匪に因て之を吐き出さざるを得ぬ事となるのである。そこで多くの支那の土豪等は内地に居ては頗る危険を感じる所から今日は上海なり香港なり又は天津なりの外國の租界に遁れて、外國の法律で守護される事を希望すると云ふ氣の毒な状態である。支那の土豪は危険だから滅多に門から外には出て來ない。邸内で贅澤な料理を食べたり爪でも長く伸ばしてユツタリとして居る。彼等は邸内で王侯貴族の生活をしてゐるのみでなく寺院などにはウンと金を出す。以前に百だけの悪い事を敢行したとすると百二十も良い事をしようと云ふ積りで神様に御馳走をする。併し神様には見せる丈で直ぐ家を持つて歸つて家の下男に持たして外で賣らせる。そして其の金を又ポケットに入れると云ふ有様である。地方には饑饉であると金持は寺に行つて粥を炊く。所謂稀飯を炊いて其地方の饑饉で困つて居るものを養つて居る。或は孤兒を育て或は病氣で藥の買へないものに藥を與へ葬式の出せないものには葬式を出してやる。其他身の上の相談等慈善事業は各社會で相當に行はれて居る。普通中流階級のものと同郷會を拵へたり、會館を建てたりして、職業の無いものには職業を與へ、病氣のものは治療させ、旅行者には宿を與へると云ふ風である。日本では體裁の良い社會政策などと云つて金持に媚びる様な事許りしてゐる。此頃はいくらか金持でないものも惠まれる様になつて

三、明るみに出た社會相の數々

支那には地方々々に土豪が澤山ある。一町四方、二町四方、或は三町四方と云ふ様な廣大なる邸宅を構へて、周圍は樹木に掩はれ、中に物見櫓が聳えて居る。そして其の邸の塀垣は天日で乾かした煉瓦で取り圍まれて居る。南支那の土豪は多くは山の高い所や突き立つた岩の上に邸宅を構へて居る。土豪の主人公が緑の轎子に乗つて外出する。土匪が外で待つて居て忽ち主人公を奪ひ去つて、其の山を越え谷を渡つてどこかへ伴れて行く。さうしておいて、其の仲間が土豪の留守宅に行つて白々しく主人公はもう歸りましたかと聞く「まだ歸らない」と云ふと「さうでせう、こちらの主人公は僕の方の山寨に連れて行かれて居る。十萬圓か十五萬圓持つて來れば歸してやる」と云つてサツサと歸つてしまふ。けれ共若しも金を持つて行かない時には、次には主人の指を切つてそれを板の上に乗せて持つて來る。そして「此の指に覚えはないか、まだ金を持つて來なければ足を切つて持つて來るぞ、可哀想だと思ふなら早く金を持つて來い」と云つて歸つて行く。それだから無理矢理にでも金を拵へて持つて行かなければならぬ。かう云ふ事は如何にも野蠻極まる行爲ではあるけれ共一面から見れば支那の現狀に於ては知らず識らず社會政策が行はれて

來るのである。即ち萬民の膏血を絞つて金を貯へた富豪等は、結局土匪に因て之を吐き出さざるを得ぬ事となるのである。そこで多くの支那の土豪等は内地に居ては頗る危険を感じる所から今日は上海なり香港なり又は天津なりの外國の租界に遁れて、外國の法律で守護される事を希望すると云ふ氣の毒な状態である。支那の土豪は危険だから滅多に門から外には出て來ない。邸内で贅澤な料理を食べたり爪でも長く伸ばしてユツタリとして居る。彼等は邸内で王侯貴族の生活をしてゐるのみでなく寺院などにはウンと金を出す。以前に百だけの悪い事を敢行したとすると百二十も良い事をしようと云ふ積りで神様に御馳走をする。併し神様には見せる丈で直ぐ家を持つて歸つて家の下男に持たして外で賣らせる。そして其の金を又ポケットに入れると云ふ有様である。地方には饑饉であると金持は寺に行つて粥を炊く。所謂稀飯を炊いて其地方の饑饉で困つて居るものを養つて居る。或は孤兒を育て或は病氣で藥の買へないものに藥を與へ葬式の出せないものには葬式を出してやる。其他身の上の相談等慈善事業は各社會で相當に行はれて居る。普通中流階級のものと同郷會を拵へたり、會館を建てたりして、職業の無いものには職業を與へ、病氣のものは治療させ、旅行者には宿を與へると云ふ風である。日本では體裁の良い社會政策などと云つて金持に媚びる様な事許りしてゐる。此頃はいくらか金持でないものも恵まれる様になつて

来たことは来たが、まだ日本からはかう云ふ弊風が除去されない。然るに支那は早くから経験に経験を重ねた結果、社會政策が良く出来て居て社會の事は政府の干渉を俟たずに社會自身で解決する様になつてゐる。そこに支那の社會の偉い所強い所がある。又支那人は政府や役所に頼らない代り、大臣でも高官でも少しも偉いものとは思つてゐない。全く眼中に置いて居ないと云ふ有様である。北京大學なども全然文部省から獨立した位であつたのである。此點も官尊民卑の日本と餘程異つてゐる點である。ところが支那と云ふ國は猫の目のやうに變るところで北京大學あたりの所謂赤化分子の近況はかうである。

奉天軍の入京以來左傾派に對する取締は嚴重を極め、特に北京大學は赤化の淵源だと言ふので李景林、張宗昌等は閉校を主張し齊燮元、張學良等は其教授學生等の赤化分子は比較的少數であつて赤化の親分は皆逃亡した事であるから少し手心を加へて然るべしだと主張し、此結果北京大學を實地検査する事に決定したと云はれて居る之を聞いた教授や學生は赤化分子と見られるを恐れ赤い書籍とかその他の證據物は露西亞型の帽子さへも埋滅したとの事である。猶ほ奉天軍當局は他の國立大學の調査をも開始すべしとの説もあるが結局水鳥の羽音に驚いて逃げた維盛の例に過ぎぬであらう。因に北京大學は殆ど十二ヶ月間教師の俸給も不渡りで教師の五分の一は授業を

停止し、時局の影響を受けた學生は郷里よりの仕送りも絶え授業料を満足に納むるものは二分の一しか無い、爲めに十三ヶ月間に集まつた金は一萬元に過ぎぬ。學校の會計方は四苦八苦の態であるとのことである。

四、土匪や赤化に對する精神生活の根柢

自分は初めて支那に出掛けて行つたり。支那の土匪の騒ぎを新聞で讀んだりした時には、支那の國家社會を亂すものは、土匪より大なるものはない。土匪は根本的に討滅しなければならぬと考へて居たが、臨城事件以來土匪に對する考へが一變してしまつた。清朝と云つた所で一面から見れば土匪の大きなものだと云へる。斯う云ふ者が天下國家を私してしまふのは社會の秩序を搔き亂したものである。元來支那の缺點は文弱に流れると云ふ事であつて、其の文化は文弱に流れ易い。文化が普及すれば綺麗な着物を着たり、宮殿で贅澤な生活をしたり、甘い支那料理を食べたりして酒池肉林の安樂世界を實現する事となる。之も初めの二代や三代は良いが、五代六代十代にもなると小指で押されても倒れてしまふやうになる。土匪はかう云ふものに活を入れ目を醒まさせる。

故に、支那では土匪や馬賊の害は夫程氣にしくなくとも良いのである。却て土匪の將來は、前途洋々たる者があると考へられる。一見した所では土匪は泥坊のやうな風をしては居らない。土匪村でも税を出して通れば何でもないが、併しピストルや護身刀を持つて居ると却つて殺されてしまふ。兎に角土匪や馬賊を支那の社會から絶滅してしまふ事は永久に想像出來ない事である。

支那の田舎に行つて文字を書いて筆談をしようとすると、色々持ち廻つて見るが誰も判らない。そこで村夫子の處や寺の僧侶の處に行つて見ると云ふので、支那人は案外に文字がない。支那は中華と云ふので總ての人が文字を知つて居るだらうと誰も思ふが、支那人子弟の大部分は學校などにも行かない。又行くべき學校もない。又餘り教育を受けると社會がむづかしくなると思つて居て。支那の文化は唐の太宗から玄宗皇帝の時が一番絶頂に上りつめた時で、日本の弘法大師や傳教大師などの行つた頃である。其頃の文化はあらゆる文明が發達の時期に達して居たのである。勿論支那の文化は三皇五帝の時代より周の時代、六朝の時代、春秋戰國の時代にも相當の域に達して居た事は皆人の知る所であり、そしてその文化が如何に日本に多くの影響を與へて居るかは今更事新しく述べる迄もない。殷の時代でも相當の文明を有て居て都市の計畫などは立派なものがあり、曆法なども良く發達して居た。斯くの如く支那の文化は三千年五千年前に既に驚

くべき文明を有て居て文化の底力は地球の中心迄も貫ぬいて居る。故に今日勞農ロシヤが四百萬や五百萬位の小ツ葉金を振りまいた所で、支那人が夫れが爲に騙されて赤化するやうな事はないであらうと思はれる。支那は支那として行くべき道を行くだけであらう。そこに深刻なる支那精神の根柢が潜んでゐるのである。

五、矛盾の多き支那社會生活

支那の社會は又其の大自然の感化に負ふ所が頗る多い。馬の背の様な眞中の高い日本の自然は勢ひ川に急流を生じ、随つて餘裕の無い齷齪した性質を産み出して來る。之に反して、支那には揚子江の様な漫々たる大河があり、大平野があり、大湖水があるので、人の心も亦悠々閑々のんびりし居る。例へば揚子江には洞庭湖の方から筏を流して來るが其の筏には百人も二百人も載せて五ヶ月乃至八ヶ月もかゝつて目的地に達し、二ヶ月も三ヶ月も費して商談を調べて居る。尤も支那でも四川省の奥の方は、揚子江の急流であつて商人も間髪を容れない程の機敏さで商ひをして居るが、大部分の所はのんびりした悠長の氣分で呑氣に構へて居る。さう云ふ譯であるから社會全體の空氣が支那の氣持其の儘をうつつし出してゐる。だから人々の氣持も緩やかである、時節

の觀念を超越して居ること等は日本では到底見られぬ所である。例へば人と會ふ約束をして居ても雨が降れば行かなくてもよい事になつて居るし向ふでも來ないものと定めて居る。

かう云ふ風なのんびりした生活を送つて居るから支那人は長生きするものが多い筈である。併し之を打ち壊して不衛生に導くものは、阿片を呑む習慣があるからである。阿片を呑む習慣のあるものは呑まないで居ると悪感を感じると云ふ。支那人と話をして居ると時々話し最中に彼等は一寸阿片を呑んで來るからと云つて別室に退く。三十分でも經つて出て來て、又前の話を續けるのである。勿論上海や北京では阿片を呑む事を悪く云つて居るが、一步田舎に行つて見ると阿片の栽培は却て獎勵されて居る。阿片を澤山作つたり、印度やイギリスからうんと入れて税を澤山とらなければ、地方の經濟が成立たぬと云ふことである。併し表面はどこ迄も嚴禁する事になつて居ることは云ふをまたぬ。それだからどこに行つても阿片を毒蛇に例へて、學生、兵隊、百姓等總有ゆる社會のものが此の毒蛇を退治する所の繪を貼出し、阿片の害の恐るべき事を示して居る。是等を見るとよく事情を知らない外國人は、支那人は斯くの如く阿片を憎み却けて居るから、此惡癖の絶滅される日も近くであらうと考へて居る事だらうが、事實は却て夫れが獎勵されて居るのだから表裏の一貫しない支那人の實際には誰もが一驚を喫するのである。

又支那人は如何に政府が命令を出さうが中々云ふ事を聞かない。例へば頭の辮髪を切るのが惜いと思ふものばどこ迄も残して居る。そして已むを得ない時には居留地に行つて外人の召使ひにでもなれば良いと腹を定めて居る。こは婦人の心理でも同じ事であつて、何時迄も美人になつて居たいと思へば、纏足をとらない。實際纏足して居ると良い所に嫁入りが出来るのである。總て日本人は自分の意思を枉けても人の機嫌をとる事が多い。日本人は人の反對を氣にして我を殺してしまふ事が多いが、支那人は折れさうでも却々折れない。例へば日本人は今日青島を返してしまつてあつさりして居るが、イギリス人などは威海衛を返す々と云ひながら何とか理窟をつけて返さない。日本人が返したからと云つて支那人は別に喜びはしないのみか、今では反對に彼等には日本人の持つて居てくれた方が良かったと云つて居る。其の譯は支那官憲の統治のだらしなきに愛想をつかして居るからである。日本人が持つて居たときには時間を定めてキチンと發車して居た、然るに今では定めた時間にも發車しないので、出して貰ひたいと思ふものは特に驛長に袖の下を使つて頼まなければならぬと云ふ有様である。又た客車の中には雨が洩るので雨傘をさして乗つて居なければならぬと云ふのであるから、彼等は日本の租借時代を寧ろ懐かしく追憶して居る状態である。全く租借地を還されたのがよいのか悪いのか。何が何やら判らぬ。實に

支那の社會生活には矛盾が多くて一概にどうとも云へないのである。

六、功成り名遂げた後の願望

支那の文人は人を訪問する時には瓢箪の様なものにコーロギや鈴蟲を入れて行つて、卓上に置いて蟲の鳴き聲を聞き乍らゆとりのある程度で話しをして居る。又銀行會社に出て居る連中は窓に鳥籠をかけて鳥の啼き聲などを出し乍ら人生を樂みつゝ執務して居る。總て支那人は動物を愛護する事は日本人より優つて居る様である。思ふに日本の家畜位可哀想なものはない。牛馬にしても支那人は鞭をつかはない。それでゐて一疋も埒の外に出る事はない又日本人は他人が來ると、障子を立てたり衝立を立て廻したりして其影にかくれて飯を食べるのが例であるが、支那人は却て道路に近い所に出て、道を通る者迄も呼び込んで一緒に食べさせて喜ぶのがある。併し別に御馳走があると云ふわけではなく、普通の食物を振舞ふ許りであるから箸と皿とさへあればよいのである。之は人を見たらば泥坊と思へと教へられた日本人の社會とは大いに違つて居る。

支那人は功成り名遂げた後には永生きをするだけが唯一の樂しみとしてゐるのである。故に永生きをする爲にはどんなに高い藥でも出来るだけ探さうと考ふるのである。不老長壽の藥の「冬

蟲夏草」は西藏から出来るものである。其他蛇のキモを用ひた蛇酒、虎の骨の酒等も若返りの樂として用ひられて居る。要するに支那人は不老長壽によつて歡樂の世界を味ひたいと云ふ事が終局的目的である。それであるから彼等は成る可く平和なる國家を實現して歡樂を味はひたいのであるが、どの政府を拵へて見てもいつも無力のものばかりで何の役にもたゝない。且つ戦争や掠奪を事として居るのであるから、政府は更に有難くない。故に自分で生活するには自分で働くに限ると考へて居る。故に彼等は歡樂前には國家も國際も何も無い。但し迷信の方から道教だけは長生き、蓄財、子孫繁榮等の願ひを容れてくれると云ふので一般から非常な崇拜を受けつゝある。斯くの如く日本と支那との風俗習慣は、頗る異つて居るが、それは兎に角として、日本人は今後益々隣邦支那の種々な社會相を研究して日支各人の連絡を密接にし、愈々兩國親善の資に供さねばならぬと思ふのである。

支那人の超法觀念

支那の超法觀念は、
法律の外の道徳的義務を
重視する傾向がある。
これは、儒教の徳治主義
と深く関係している。
法律は、徳の不足した
場合に用いられる手段
と見做される。従って、
法律よりも徳を重んずる
のが、支那の超法觀念の
本質である。

一、支那民衆の法律觀念

支那は法治國と稱し得るや否や。一體支那は法治國とも見えてゐるし又全然その反對のやうにも取られてゐる場合が多い。支那は見やうによつては國家である如く見えてゐるが國家でないといふ筆法を適用して、支那は法治國である如く見えてゐるその實、法治國でないとも云へる。どちらとも云へるけれども事實は矢張り法治國と見るべきである。たゞそれが支那は一種獨得の國であるからどちらとも云へる丈のことである。

打ち明けたところ支那ぐるる世界中で自由な國はない。極端に自由に開放せられた國である。殆んどリベラルな自由な思想を鼓吹しても構はないし、時としては國家がそれに援助を與へることもさへもある位である。又思想上ばかりでなく行爲の上にも勝手氣まゝなことを敢てしても而かも氣がねすることも何も要らぬ。人は人たり、吾れは吾れたりと云ふ氣分がいつの世にも漲つてゐる。従つて随分思ひ切つた言動が支那では何等世上の問題となることなくして是認せられ通つて行くのである。固より古からこれらの放縱なる言動を許さず、賞すべきは必ず賞し、罰すべきは必ず罰すると云ふ峻嚴な法の適用された時代もないではなかつた。決してルーズに放漫に任せ

ておくことを能事としてゐるのではないと云ふ見方も出来るのである。或はしかし春秋戦國の世には動物を持つて來て神判（ゴツテス・ウアタイル）の形式をとり神前に法を行つたことさへもある。少しく神話がかつた話になるのであるが實際あつた事實である。このことは詳しくは墨子の明鬼篇に「齊の春秋」として神羊の用ひられたことが載つてゐるのでよく判る。

支那では極めて古い時代に遡つて見ると。人間の裁判によらずして動物はむしろ其神聖視せられたる羊とか獬豸とかを用ひて判決を下す際その神判を仰ぐ習慣になつてゐたのである。と云ふのは不完全な人間では是々非々を誤るの虞れがあると見る。上古の人情美をどこ迄も善なりと判決を下さしむるには必ず人間以上の神力通を有する神羊に據るを最善の方法と考へて居たらものらしい。その爲に「善」の字そのものの古い字形をしらべて見てもわかる通り之に羊の字が含まれてゐる。之は神羊を神前に置いて原被兩造に刑の宣告を與へたりなどするとき、きつと羊を用ひた。そこで羊の字の下に言の字を二つ並べてあるのである。それは次の通りに書かれる。

善……善の字の古形の構造、之を略して「善」と書く。

更に又法の字の古形をしらべて見ると之には羊に類した解豸と云ふ神獸が用ひられてゐる。五雜俎あたりの後世の文獻にはくはしいことは出て居ない。けれども古代の文字を分解しその最初

の古形をしらべて見るといくらでも之を證明するものが見出されるのである。それによると少々面倒な字の構造になるのである、けれども次の通りの要素を持つてゐることが判る。

灋……法の字の古形の構造、之を略して「法」と書く。

これは篆書の古體で示さなくては十分の理解は得られまいと思はれるがつまりは鷹は鷹の字の艸冠のない字で豸と云ふ神獸の象形文字である。法を定むるに上古此の神獸によるの思想はよほどひろく行はれてゐたものでこれは前の神羊による風習と似た考である。秋の宣託をこの神獸がするものと見ればよろしいのである。又法の字の偏に用ひられたる三水の水は即ち水準、公平、無私なる意味を示したもので、法とはいつまでもこの水の如く水平を保つもの。平等の考は水を使ふにかぎると見たものであるか。或ひは熱湯の探湯の方法でも用ひたものかも知れぬが、要するに水そのものが古代の裁判に役に立つてゐることは明白な事實である。神獸の方が正義、善道を示しンボライズするものとするならば、水は公平無私の象徴であると思つて差支ないのである。ジャステイスとそしてイクターリテイとを示すことが法の宣告の精神としてゐる處は古代羅馬の法律などと比べて興味が深いのである。善の字にしても義の字にしても又儀にしても義（ウラム）にしても之に羊の字の含まれたるは意味深長であると云へるのである。此事に就いてはかつて自分は

國家學會雜誌に詳述して置いたからこゝには贅しないでおく。

八一四

古代支那人の考へは之を迷信と云へば迷信とも見られるであらう。けれども、どこ迄もこは上代の支那の風俗としてかくの如く神獸による處の念の厚かつたものと云へるのである。従つて古代の民衆はかくの如き法の觀念をひろく漾はせてゐたものと見ることが出来るのである。

しかし一方から見ると支那人のあたまでは法律なるものゝうちの不文律とか習慣法とか云ふものは何でもない當然のものと考へ別段之をわざ／＼むつかしい法律の範圍内には入れて考へてはゐないものらしく、むしろ常識の一つとして、之を見てゐる丈のことである。そして習慣は習慣、法律は法律である。法律と云ふものは、その律と云へる文字の示す如く一旦その「筆」で書き記されたものでなくてはならぬ。つまり律令、規律すべて律とは筆で以て記されたもの、公布されたものと見られてゐる。つまり律は矛と聿とに分解されるのであるから、古は律は筆から出ると考へられる。此ことは漢の揚雄の方言にも見えてゐるのである。筆になつたものを法律と考へて、そして唯の習慣や不文律できめて行くものは八釜しい法律とは見てゐないものであるかのやうに見られるのである。もと／＼律令と云ひ、典禮と云ひそは區別のむつかしいものであるが根本を云へば凡て習慣に本づくものでなくてはならぬ。何と云つてもその最も大切な力となるものは古來習慣と慣例とによると云ふことが一番大事なこととなるであらう。

二、法律よりも宣傳に力を

支那人の古禮を重んじ慣例によることに重きを置くことを見ることは云ふまでもないが、しかし又支那人ぐらゐる堅白異同の辯を立て詭辯を弄し議論を好む民族は滅多にあるまい。その社會の中心力がいつも議論に在ると云つてもよい位に議論が好まれる。豈辯を好まん哉と云ひつゝも尙且つ滔々と辯じ立てゝゐる。これはひとり孟子ばかりではないのである。しかし議論の爲の理窟であつて、多くは腹の底にはそれほど考へてゐない時であつても、表面には口角泡を飛ばして大いにやり出す。又やらずにゐられないのである。

殊に支那の社會の風潮と云ひ、又社會習慣と云ひ、其多くの人の前で辯論をやつて大向ふを相手に意見の發表でもやることは大いに自己の體面をあげる譯になる。一つには(メンツ)面子の爲に滔々とやつて見る。つまりそれによつて世間から注目をひく。若し議論の立てかたのよいときは天下のものを風靡して大いに人望を集め得る一躍して評判の名士となることも出来る。歐米がへり、日本がへりの連中には殊にその手合が多いのである。云ふだけ云つて見て功がなければも

ともである。若し萬一にも功を奏すれば云つただけ徳であるとはよく支那青年から聞かされる告白である。云ふ迄もなく支那は法律も制定せられ、法治國で々もある。けれども何分にも口八釜しい國であつて治まりがつかぬ。議論を戦はし始めたら蟬噪鳴蛙實にぎやかである。法律も何もそつちのけにやり出す。最近二十一箇條がどんな内容であつたかも知らずに唯ガヤ／＼騒ぐ連中の多かつたのと同じことで、凡て民衆は法律でも何でも超越して了ふのである。そしてその期するところは唯その宣傳にあるのである。宣傳で功をさへ納め得たならばそれで目的は達せられることになる。そこに何とも云へぬ強味がある。又支那人の支那人たるところがある。宣傳力の足りないものはその勢ひに負けて了ふのである。理に於いて勝つても宣傳で負けて了へば失敗である。これはよくあることである。有り體に云へば支那は法律三分に宣傳七分と云つた國であると見ておけばよろしからうと思ふ。

この故にどうかすると支那は對外關係のことなども國際法も何も超越し、唯天下を風靡して民衆的に騒ぎ立てることがある。又支那民衆の血を湧き立たせるにはこの對外的の問題を掲げるのが一番賢い方法である。眞面目に外國に對する過去の義務を果たす方のことは棚にあげて置いて云はず、もし立派な理窟さへ立てば權利の方をのみどし／＼主張して傍若無人にやつても尙且つ

人望を得ることが出来又喝采を博するのである。靜かに考へさせ法律づくめで行くやうにと話をわけてやつて見たりしても耳には這入らぬ。それよりもあたまがさきに／＼と利くものであるから、一度きめたことなどを追つて行くことは馬鹿々々しく感ぜられて來るものらしい。そして四億萬の民衆の力をバックに一にも二にも宣傳の力で行かうとするのであるから大抵のものは手こずらせるのである。吾人の最近の苦惱もこゝにあると云へる。しかし又一面には支那人の所謂理窟、宣傳の内容には一應尤もなところもあるのである。いざとなれば法律も論語も失敬して了つて天來の警句を吐き、風に嘯き月を吟じ洒々落々光風霽月の雅懷を偲ばせるところであつて、衷心無邪氣な可愛いところが見出されるのである。祖先傳來の法の觀念などからは全然超越して涼しい程度になつてゐられる丈のゆとりを持つてゐる。又さうしてゐられるところに何とも云へない羨しいところがあるやうに眺められるのである。

國家をなさぬ支那から觀た日本の長所と短所

外國に比して日本の長所に感じた點と短所と感じた點に就き卑見を述ぶるやうにとの御意、自分は平素自分の天分と心得てゐる支那の方面との比較に就いてのみ私見感想を陳述して見たいと思ふ。日本的の文化特に日本固有のものに就ての研究趣味も頗る興味あることなれども今は主として支那に照らしての長所と短所とを述ぶる方が痛切なる問題に觸れるやうな氣がするからこの方を述べる。

一、日本思想の長所

支那から觀て、日本がどれだけ優れてゐるか。日本の方が社會として又個人としてどれだけ進んでゐるか、冷靜に考へ來たれば疑問のことが多い。社會として、又個人として日本を支那に比べたときには日本の方が劣つてゐることが多い。比較にならぬほど劣つてゐるであらう。しかし國家の方から云へばとにかく日本の方がよく纏まつてゐる丈けでも日本の方が長所を有してゐるかと思ふ。支那の今日は國としては中々振つて來た。胡適(コセキ)梁啓超の如き新人の出て大いに國家の進運に急激なる衝動を與へようと努めてゐる者もある。しかし全體としては國が廣きに失して思想のまとまりがつかぬ。否まとまりのつかぬ所が支那の支那たるところである。之を纏

まりのつくことが支那の國として必要であるかどうかは別問題と考へられる。有體に云へば支那は古來國家らしい國家をなしてゐたことがない。されば纏まらなくて少しも構はぬとも云へる、まとまる必要がどこにあるとの議論も出来る。春秋戰國以來いつも事實はまとまつてゐない。長い歴史を通覽するに事實をさらけ出して考へて見たらいつの時代にも諸子百家の説が出てゐるやうに色々あるのでないかと思ふ。一見纏まつた如く見えてゐてもそれは書物に書かれたもの丈けに就いて云ふのであつて事實はどうかと思ふ。國は廣いし、地方的の色彩はあるし、容易に纏まるものでないと事實上思はれる。之に反して日本は之と大に趣を異にしてゐる。

日本の場合には日本の長所として考へてゐるところであつても之を支那に當てはめたならば長所として考へられないこともある。要は日本の國情によりけりである。日本の長所として日本の思想が比較的によく纏まつて行く、所謂國論が一致するとか思潮が大體同一歩調で行くとか云ふことは日本の如き國では必要なことである。日本から見るとそれが支那に實現されたならばと願はしく思はれるがそれは先づ百年の河清を俟つ流儀である。日本にはそれが國の小さい爲め國の言論機關の設備が十分ある爲めよく津々浦々まで行き互つてゐる。纏まりのよい悪いから云ふと日本は支那よりもよいと云へるがその思想の内容から云ふと何れに優劣長短があるか一寸速断は

できぬ。支那はのろいやうで急轉直下に激變する。全部臺なしにして了つて新奇に行かうとする所の思ひ切りが速い。實に急に行く。他に對する氣がねとか束縛とか、歴史習慣を平氣で棄て、了ふ。それで何とも思はぬ。日本人はそこに行くに氣がねがあり束縛があり歴史と習慣たとひそれがつまらぬ歴史と習慣であるにしてもそれに拘泥して了つて中々新生命を開くなどと云ふことはむづかしい。しかし支那人よりも氣が軽い丈けに他國の長所と見たら随分構はず取入れて所謂新しがるやうなものもある。一時代を風靡して進んで行く。そこに強みがある。長所がある。殊に先進國の眞似みたやうなことであると、心に深く考へずして形式ながら之を模倣するやうなことであります。事大思想と云ふ程でもないが幾分そのやうな空氣は言はず語らずのうちに見出される思想の幅とか深みとかは少ない。けれどもとにかくよく速く進んで行く。長足の勢を以つて押し進む新奇のものを取り入れようとの念慮が強くてよく進むのである。日本思想——國粹論者からはとかくの評を下すことあるも、大勢はそれで駸々乎として進むのである、この邊を先づ長所と見ておく。

二、日本の自然と社會から受けた長所

いづこの國民にもブラウドがある。又ブラウドは或る程度までなくてはならぬ。個人に或る程度まで内心に己惚れがあつて然るべしと云ふのと同じ譯である。支那には支那相應のブラウドがあり、實價以上のブラウドもある。日本とは同じ東洋にゐる爲め又同じ歴史的關係にある爲め親しみたいと云ふ考もある。しかし日本には米國のやうには金がない爲めその點でいくらか安ほく見てゐる。否かなり見くびつてゐる。これがひがみでなく事實上海あたりには著しくその空氣が見られると云ふ。かやうに見て來ると日本人は自分のブラウドがあつても支那の人は日本人よりも目先きのよく利くことは數百倍數千倍であるから公平に云つて日本人が自分のブラウドの價値だけには支那側で買つてくれないのである。けれども日本には日本の天然自然地理から來たよい長所がある。所謂日本の山水の秀麗の氣を受けた美しい國民性がある。支那の濁流滾々たる土地に國を成すもの、民族性とは先天的に撰を異にすると云つてもよい位の長所を持つてゐる。無論支那でもその地方によつては日本に負けぬ麗はしい山水のところもありその山水の感化が地方の人心によい影響を及ぼしてゐる所もある。けれどもその點は、日本の方が青々としてゐるたしかにその秀麗の氣をうけてゐる點は多いかと思ふ。従つてこれが國民性の上に現はれては瀟洒とか清楚とか淡泊恬淡とかよい意味に於いてこさつぱりした氣持ちを養成してゐるのである。無意識

の間に吾人の國民性をこの自然がよくも教養してくれてゐると云ふ風に考へられるのである。のみならず日本の社會は支那のそれに比べると利慾の點にかけて潔白に淡泊にあるべきものと云ふ習慣性が永く風をなしてゐる。殊に武士道の影響感化力が強く今も尙利のことは人によつては云つては人格に係はるとまでされてゐる。支那では官吏役人にして而かも利のことの爲めに一生懸命になる仕組みに出來てゐるに比し日本では公職として職務の形式さへ行へば利のことなどどうでもよい。國庫の收入になる額が多くなるやうに努力しても努力しなくても唯形式だけ勉めてゐればそれで勤まつて行くと云ふ習慣がある。まちがひ瀆職をしなければよいと云ふ丈けのことになつてゐる。支那の役人から云はしむれば、つまらぬ職柄と見えるであらう。しかし日本では社會の制裁がそのために特にやかましく出來てゐる爲め國家機關としてはよく進むのである。そのやうな利財の點にかけては比訪的に淡泊に進むことになつてゐる。これは自分の名譽とか人に對する氣がねとか、來てゐるのであるが兎にかくこの點は日本人の美點長所として數へらるべきものと考ふる。

かやうにして日本の自然なり社會なりが日本の國民の思想に及ぼしたことは無限である。自分はこの國體論などのやかましい議論は持出したくない。今日これ迄のところでは日本の國體の

考へがたしかに立つてゐる容易のことで之を云々するものはなかつた。今日及び今日以後は國民個人々々の生活の安定を得られぬ社會上の一大缺陷のある爲めこの邊に思想の動搖がいくらか芽を出し始めるやうなことはないかと案ぜられる。國民としては生活のことぐらゐで思想が云々と云ひたくない氣もするが、事實は生活問題が社會問題を起し社會の安定を根本から覆へすことも殷鑑遠からず見られてゐるのであるから、日本のこれ迄の社會が餘りに淡泊に超然的大名であつたと云ふことは今後の爲めにはならない。この點から見て從來の長所は必ず長所として長閑をきめ込んでゐるわけにはいかぬのである。

三、日本思想の短所

日本がこれ迄小日本として對内的に色々の美點を持つてゐたことはたいした自慢にならぬ。戰爭に強いことも大事である。けれども之を自慢にも出來ねば、戰爭に負けた者を馬鹿にしてゐるわけにも參らぬ。日清日露の戰で勝つたことは勝つたけれども支那人々は必ずしも負けたと思つてゐない。地方によつては兒童には日本が負けて支那が大勝利を占めたのだと教へてゐる所もある。露西亞だつてさうである。それを日本人から國全體として負けた國のやうに見くびつて了

ふのは自國の小國を以て大國を推定してゐる淺間しさである。日本人には自身が相手の國の人になつて考へて見ると云ふ餘裕がないのではないか。國民性の然らしむるところで、一本調子のところが多い。自分が一本調子であるから人も亦一本調子であるとする。支那の場合の如きは決して一本でない、十本も二十本も考へてゐる。中々簡單には行かないのである。一時的に強く熱する。萬事を忘れて了ひ、そして一事に熱する。そのくせすぐ冷却する。そして七十五日経たぬうち全く忘れて了ふ。やりばなしにする。それで人も咎めず自分も咎めない。淡泊でよいが、然し根氣がない。根づよい所がない。日本人に對して一時何とか云つて巧みに受け流して觸れぬやうにしてゐればそのうち忘れて了ふ國民であると云ふ風に見くびられても仕方がない。

また支那の人々から見ると日本人はよく調子に乗る。乗り過ぎることがある。よい氣になつて了ふ。比較的に他を顧みて反省するとか云ふことが少なくてオダテが利く傾向を持つてゐる。その點で支那人からよく拜み倒されることがある。辭令を巧みにすることの天才的な支那の人々からは往々にして天子にでも對するやうに拜せられる。年賀狀を支那の子弟の父兄から寄越すときの如き聖天子、一天萬乘の君に對するやうに一々擡頭の語を用ひて嚴かに莊重なる態度をとる、その癖それ程心に思つてくれてゐるかどうかは勿論疑問である。日本の國民全

體に外交的の訓練が足りない。經驗が少ない。殊に國際の場合の如きは全く判らぬものが多い。口には國民的外交とか何とか云つてもまだ國民にそれ丈の歴史がなく訓練がない。自分の國內丈にて堅く固まる呼吸は心得てゐる。その爲めの愛國心はあるが、しかし他を包容し大きな態度で國際的に國民外交をやつて行かうとする場合にはまだく、幾多の短所がある。非常な弱味を有してゐる。愛國心は十分にある、十二分にある。けれどもそれは日本の國土の幅員と同じやうにその幅が甚だ狭まい。狭くて固まる特徴を有してゐる。けれども更に大をなす爲めには更に他の或る要素を有してゐなくてはならぬ。幅を廣くするとの考は起らないで唯たゞその狭いまゝで他を顧みるの餘裕もなく一直線に進まんとするのである。これが日本人の思想態度の上に於ける一大缺陷であると思ふ。

四、短の短なるもの

支那ばかりでなく日本人が諸外國の人々に比して著しく劣つてゐる點、後れてゐる點は其平生の社交的のことには下手と云ふことである。人を見れば泥坊と思へと云ふ考は大分なくなつた。しかし今以つて人を容れない。人を他人視し殊にまだ知り合はない人であると泥坊が危険な人で

あるかの如き眼付きをして眺める。いつでも自分の友人にすると云ふ様な暖かい用意のある態度でゐられぬと云ふ短所を有つてゐる。その爲めに日本人は誤解をいつでも受ける。誤解位は構はぬとしても自分を大ならしむる所以でない事は事實である。又そとに出たがらない。外國に渡航することが嫌ひである。オックウがる。海外發展とは文章や言論の上でのみ云ひ實際上には食つひめものか何かでなくては自分たちは落ち延びなくてもやつて行けると云ふ態度である。滔々皆然りである。

日本人の武士風に教養されてゐることもよいが、今日の世界の氣勢に順應するやうに社會的に躡けられてゐないと云ふことは、どれ位日本がいつも不利な立場になつてゐるか判らぬ。學校の教育を見てもいつも書物の上のことのみ八釜しく、社交的の教養のことは校長も受持教師も多く考へてゐないらしい。文部省もその邊は大いに足りなくはないかと思ふ。日本の教育方針は智育萬能の觀があり毎日通學してゐてもその方面は大いにぬかつてゐる。これ迄は島國內にて活動してゐたのであるからそれでよかつた。然し今後はその非社交的な態度を改善して行く必要がある。さなくはいつ迄も國民外交にまで進展せしめて行くことはむづかしい。その點が改まるやうになれば邦人の極めて狭い狹介な陰氣くさい態度も漸次改善されて來ることと思はれる。この點は特

に邦人の短所中の短所とする所であるから一段の努力を望ましいのである。

八三〇

五、反省を要する日本の知識階級

外國に比すると云ふうちにいつも先進國としての歐米と比較することのみが能事と考へられ支那と比較されることは思ひもよらぬことと思はれるかも知れぬ。しかし流石の歐米説に傾ける人も支那と比較することの方が一層痛切に感ずる節ぶしが多いのであるから少し足もとを考へて見る必要がある。兎角人々は支那を二流國三流國と考へて居る。それは國として又政府としてはさうであらう、けれども實は國を成してゐない國としては殆んどなつてゐない。その代り個人として日支兩國を考へ國民と國民との比較をすると日本はとても及ばぬことが多いのである。人間學を己に三千年四千年の昔に疾くに卒業してゐる漢族と比較されては日本人は決して及ばぬのである、その反對に國家として支那を日本に比べたら支那はどのやうにヒーキ目で見ても日本には及ばぬ。決して及ばぬのである。國として駄目なものである、少なくとも今日見るやうなものは又役人としても甚だ心細い。望みがたい。愛想がつかぬ。こゝには支那のことは云はぬ。要は日本の將來に就いてである。

從來の日本人は自國の長所とか美點とか自分で自惚れてゐた點のみを力説して國民としての缺點を指摘せず、之を反省せしむるやうな教養がなかつた。少なくとも支那なり歐米なりに比して人間としての、邦人の足りない點、國際教養として足りない點、列國に比して邦人の改むべき態度、改むべき心がけなどに就いて教養は殆んどあるのを聞かない。知識階級の人々には特に之が大事なことである。位や爵や身分のよいことが何時までも身に續くと思つてゐたら非常なまちがひで、世の中はそれらの特權の如く見えてゐるものを、こぎ落として實力で發展して行くものに加擔して行くのである。或る程度までの歴史と習慣は重んずる。が民族の發展に伴ふ丈の心がけ殊にその短所を補つて行く丈の教養の根本が確立しなくてはならぬ。これは當局者を責めるよりも國民御互が自覺してその實行期に入らなくてはならぬものと考へるのである。國民に自尊心のあるのはよい。又大和魂も結構である。勿論愛國心もよろしい。よい方から之を見れば實に萬國に比べ者のないやうにも云へる。さう云つた方が同胞の讚辭を博する。誰れだつて自分の長所の如く已惚れてゐる點を稱讚されると悪い氣持ちはしない。然し物はその内部よりのみ見てゐる丈ではいけない。外部より見る方が却て真相を得ることがある。我が人文の發展を期し、大なる文化的生活に入るに少なからざる妨をなせる我國民性の事を考ふる時の如きは、大いにその國民性

を外部より考察するの必要があるのである。

日本人同胞は銘々氣の附いてゐるやうに自尊心の強い事、大和魂の充實してゐること、愛國心の強烈であること、従つて強く固く團結する特色を有することに就いて之を肯定することは自分と雖も人後に落ちない積りである。その自尊心と云ひ大和魂と云ひ愛國心と云ひ實は餘りに小さ過ぎるやうに感ぜられてならぬ。又消極的であるやうに感ぜられる。又排他的であるやうに見える。従つて國民の外部に對する場合の事を見ると多く態度が包容的でなくて、引込み思案に終始してゐる事が多い。出過ぎると云ふまでなくとも、正當に打つて出るべき場合に尻好みしてゐるが多い。自尊心は強いかも知れぬが之を擴大して行くことは下手である。押出しが拙い。わきのものにも先手を打たれてゐる。實力の點もあらうけれども。人に致されてゐる内間でブツブツ云ふ丈である。所は相手に向ひ又は第三者に向ひどこ迄もその自尊心を押し翳して行く丈の元氣に乏しい、宣傳して行く丈の勇氣が乏しい。かくして一時期を劃すべき好機をさへ逸する事が多い。又大和魂にしても之を穿き違へて小さい大和魂をとかくに發揮する。その爲め他から笑を招いてゐることが多い。島國的の小さい負けぬ氣を出すことが大和魂の發揚であるかのやうに誤解されてゐる。つまりない些事に一々向つて腹を立て、之に反撥的行動をとることが國家

の體面であるやうに考へられてゐる。深みもなく包容力もない神經質なのが日本男子の面目であるかのやうに考へられてゐる。一々ピシ／＼シツペイ返しをするのが愛國的精神であるやうに一般に考へられてゐる。それ故に中々忙はしい。又苦勞である。又早く疲れて了ふ。根氣が續かなくなる。づる／＼香氣に大きく構へてゐると云ふ大國的氣分と云ふものが藥にしたくもない。偶々當事者に其やうなのが珍らしく現はれると輿論はそれを認容してやる丈の度胸がない。ヤイ／＼云つてぶち毀はしが始まる。國際的の異分子を氣持ちよく受容れる丈の氣分のない許りでなく、自分自身にいつも安心が出来てゐない。それが又顔面によく現はれてゐる。歐米人のゐない席ではヤツが、毛唐がと景氣よくやつてゐるが、一度その脊の高い紅毛から高らかに目のあたり出られると何だか氣がひけて、恐れたやうな態度になり日頃の口に似ず景氣がわるい。よく人には中華民國の人々を笑ふけれども、日本内地人ぐらゐる歐米人に一目をおき、そして朝鮮、臺灣、支那の人々に差別を設けてゐる國民はあるまい。日本人に長所も色々あるが、この反省すべき國民性の短所を奥深く藏してゐるは本當に發展の出来るわけがない。なぜ之を反省する氣分になれないものであらうか。

日本人の旅行者が、旅費の豊かでない癖に體裁と體面にかぶれて法外の茶代を氣張り、又小さ

い自尊心から人の忠言を烈火の如くに怒りてその好意を無にするやうな例は數限りなくある。曾て先輩の勝田主計氏の歸朝談中にもこのやうなことがあつた。紐育の某大ホテルの樓上廊下に浴衣がけて尻をまくり平氣であるいてゐた一日本紳士が偶然見つかたので勝田氏後方より歩を疾めその人の肩をかるく叩き、一寸失禮だがこゝは御承知の通りホテルの中の大廊下謂はゞストリート Street 同様のところだから、その浴衣を少しおろされてはと遠慮しつつ、忠言をなしたる刹那、アアさうですかこゝストリートですかと云ひ返すより疾いか咽喉からキヤーとばかりに痰を吐き出し、綺麗な廊下に亂暴にも汚點を作つて得々然として如何にも癩だと云はぬ許りの顔をしてゐたとの事。何たる日本人であらう。或は又同じ東洋人であると此度は見縊つて了つて、言へば判るものを迄、手が出たり足で蹴つたりなどして益々反感の度を高めて居る。雙方の事を聞いて見ると無理からぬ事もあるが、この調子であるては東洋の足もと丈でさへも氣もちよく兩方で安心してをれる時代は容易に來ない。なつかないとか、同化しないと、忘恩だとか尤もらしいことを並べてゐるが、そはこちらの申分である。兩方の事實を公平に見てやる必要がある。若し經濟的に精神的に社會的に大いに發展を圖りたいならなぜこの邊の足元の短所のある事に思ひを致さないのか。國民教育に文部省はなぜ之を矯正することを教へないのか。師範教育になぜ之を注意し

ないのか。社會教育になぜ當局は之を反省せしめないのか。この障壁を以つて日本國民の活動舞臺は常にいづこにも圍繞されてゐるのである。この障壁を取り毀はさないでゐて、新領土の民がなつて來ないの、民國人は度しがたいの、歐米人は怪しからぬのと云つたところで始まらぬ話である。

邦人が之を取去らないのにその障壁を飛越えて、發展を助け、人の福利を増進して呉れるやうな時代が來るものと思つて反省しないならば、日本人程お目出度い國民はない。丁度民國が借款の元利の支拂を停止してゐて、而かも尙人は自分を助けて呉れるものと思つてゐるのと同じわけである。唯日本の場合がそれがかねでない丈の話で理窟は同じことである。

今日の教育は天才の教育だ、文化教育だ、海外發展を圖らば年々七十萬人の増殖を如何などと、氣の利いたやうなことを公言してゐるのみで、その足元に鐵條網の蟠れることには何等の注意が拂はれてゐない。この點の反省は唯國民一人一人自ら銘々自覺して來る時節が來なければならぬ。旅費に窮しても茶代は氣張らずにゐられぬ國民性を有する日本人に在りては、海外發展の必要にいかにも迫られてゐても、この短所は除けないと云ふ矛盾の存するは不思議でない。船は怖いが海外には發展したいとか、自分からは同化しないが先方から融合して來るべしだと

か、随分虫のよい矛盾をいくつでも有してゐる日本人にはあたり前のことである。否大なる滑稽である。しかし之を單なる滑稽として笑つておくわけにいかぬ。國民的に發展して行く道が之によつて全く閉ざされて了ふからである。それ丈の重大な關係を以てゐるこの國民性の短所の研究調査が等閑に付せられてゐる。日本人一般の自尊心と大和魂と愛國心とは、又實に之を偉大とや云はん。又非凡とや云はん。

六、自ら進んで物を談ずる勇氣に乏しきこと

沈着な人は無口である。談じて藪蛇になるよりは沈黙するに若かず、物を多く語るものは輕薄、少しく語る者は思慮深き人、下手をやれば尻尾を捉まへられる。むしろだまつてゐるに若かず、何んとかかんと云つて物を云はぬ、云はないで済まさうと云ふものが多い。江戸時代から明治にかけて、それが一般の風をなしその影響で今も尙それである。新しい人は別だが多くはまだそれだ。日本人同志の間ではそれでもすむ。人情風俗習慣の異なる別の民族人種の間ではそれではいかぬ。全然いかぬ。こちらでよい積りでも相手が済まされぬ、そこに必ず誤解が生ずる。負け惜しみの人は終ひには必ず判るからなどと云つて自己を辯護するが、終ひ迄待つてゐる必要は

ない。人にやられて仕舞ふ。人に先んずる勇氣さへあらば時には宣傳がき、過ぎることもあるが、とにかく先づことがらの意味を誤解せしめないだけに氣持ちをさとらせておくことが出来る。その勇氣が積極的に活きないものは多くの場合に人にせしめられる。個人にして他人より又國を代表しては他國よりせしめられる。

これは多く事實の問題であるが、事實がたしかな根據のある事を云ふときは、尤も雄辯なる力を與へるが、又一面にはよく語る、よく談ずると云ふ言葉の力が大いに助ける。舌の廻らぬものはそこに意味が徹底せぬ。徹底せぬ丈でなく無理解のこともある、馬鹿にせられることもある。感情の行き違ひを生ずることも屢々ある。殊に海外に日本人が出かけても言葉の關係からその國の人々の間へ進んで交り、その國の人々と隣り同志の氣持ちで生活をすると云ふ考になり得ない。自然と自分は自分共の仲間のみと固まる。亞米利加に行く日本人は殊に小さく固まる。其方が言葉が厄介でない。油の水中にあつて一寸も水と和合しないやうにどこ迄も別になつてゐる、同化は勿論調子を合はすことさへしない。自然排斥せられる一方である。一つか三つの何か或る事丈を米國流にまねると郷に入つては郷に従ふのだと云ひつゝ、大部分のことは少しも郷に従はぬ。丸で日本の延長見たやうなものである。支那に入つてもその通りである。獨逸人などの支那に在つ

てやつてゐるところは、實に巧みな者でよくその地方の風習に調和させてゐる。又その氣持ちも決して油と水とのやうな不調和のことはないやうに出来てゐる。日本人の海外發展はとかく口先きだけである。其眞の發展の實を示してゐない。所謂共喰ひ主義であるばかりで、彼の地に到つて彼の民國人と共に俱にと云ふ氣分になつてゐない。これでは東に行つても西に延びても本當に發展のできない筈である。支那側からは近づきたがつても當方で之を斥けてゐる。近づけないやうに仕向けてゐる。寄り付けないのである。又これ迄のやり方では近付きうるわけがない。米人に對しても支那人に對しても、こちらから碎けて和らかく接近し、言語を以つてその氣持ちを傳ふる必要がある。

やゝもすると日本人は一等國だから、日本語で推し通せなど、大言壯語するのも坐興にはなるが、果して一等國とはどの點でかやうに自惚れ得るか。己惚るゝ前に先づ自ら言葉を以つて席卷するの心掛けが必要ではあるまいか。小さい見識を振りかざして見透かされた一等國を物欲しさに云ひ立つるよりか、直接安全にしてたしかなその土地の言葉を操りスラ／＼と用を便する方がどれ程よいかわからぬ。小さい愛國心は却つて大きな好機會を逸することがある。端西の小國が英佛獨伊の諸語を語りて、その自國の福利をいかに多く増進しつゝあるかを思ふ時は、思ひ半

に過ぎるであらう。

吾人は海外に在る邦人がいかにその一局部に固まりて、その土民の人々に別居し融和せず、そしてその言語上の關係がよく滑かに云つてゐない爲め、一層誤解を大ならしめてゐる事を思ふときは、日本内地に在る邦人が、日本の海外發展を思ふ前に、在外邦人の在外生活の實際をたしかめてからのことにしてもらひたいのである。謂はゞ日本人は海外に發展する爲に出かけてゐるながら、その實發展するの道を實行しつゝある者が少ないのではあるまいか。いつ迄も水面の上に浮ぶ油の一滴の觀があるやうでは、百年の河清を待つ類である。

七、反省を要する支那方面の調査研究

言論の上では日本は東洋に向つてと大きなことを言つてゐるが、以上の如き種々その發展に逆行せる性質が伏在し、之を除去しようともしない。支那に行つて見ると日本として國辱的なことを敢へてしてゐる事柄が多々ある。最近の中日實業硝子職工が長沙に於ける有様は、官民共に手を摺りぬいてゐることであるが此の種のこととは多々ある。英國あたりでは支那に來る紳士の職業まで調べ渡支者の資格が制限されてゐる。床屋をしたり女郎屋をしたりなどを許してゐる

ないは勿論、苟しくも國の體面に關するやうな職業を許さず、又相當の人格者でなくてはと八釜しく制限がついてゐる。この點になると日本は食ひ詰めものと云つては惡口の如く聞ゆるが、實際ひどいのが行つてゐる。その點が甚だ情けない。又肩幅狭く感ずる。

次ぎには支那に於ける調査ごとについて民間即ち在留民のうち、會社とか銀行とかその方面で、一生懸命になつて調べたやうな貴重な材料が大事な領事館の方面の役に立つてゐないこと。民間の會社では領事館を左まで眼中におかず、御役人たちに聞いたつて判るものかと多寡を括り、領事館の方では一々用が多いから大變だがその要領を得させる迄に之を調べてやる程度に進んでゐない。どうかすると役人然としてゐて、機微の間の事はあとから知るやうなことがある。又一々領事館だつてたまつたものでないから無理もない。雙方で互に尊敬し合つてゐない。雙方で迂遠視してゐる。之は獨逸あたりがやつてゐるやうにすべての在留商人でも何でも皆領事館の手足となりあらゆる報告が領事館の手に收まつてくるやうに出來て來なくてはならぬ。一心自體の觀を呈するやうになつて始めて領事館が本當に役に立つやうになる。唯御役所で形式的のことだけを頼むと云ふのでは領事館の意味をなさぬ。又會社でも虚心坦懐その調査の一步を進めたものを、領事に報告するやうにありたいものである。これらは在支那人の間に對する吾人の希望である。

八、新聞特派記事の擴張

次に日本内地に居る知識階級に對する吾人の希望を述べて見たい。それは東京あたりの人々は大阪方面とちがひ、支那をそれ程に重大視してゐる氣持が薄い。阪神間は支那を立場に仕事してゐるものも多い。東京では支那と云へば遠國のやうに考へ、氣分の上になつては之を馬鹿にしてゐる傾がまだ大いにある。口の先では同文同種だの何のと云ふが、自分で之を自らはまつて大いに研究しようなど云ふ人々は少ない。又物を珍らしさうに考へてゐる。それも支那のこと、云へば西洋人の著書か、新聞特派の記事を見る許りである。新聞特派の電報は政治上のことのみで、あんな記事ばかり讀んでゐたのでは眞の支那は判らぬ。それかと云つて支那のことは漢籍では判らぬ。漢學者に聞いたのでは尙判らぬ。判からぬやうな氣がする。同文同種だのと云つてゐる癖に、支那のことを知るに西洋人の書物を買はなくては判らぬとは大なる皮肉である。情けないではないか。これは西人の觀察がいかに實用的であり、又大いに教育的であり、一談に値することを正直に告白してゐるによるのである。

日本には漢籍があり漢學者はあり、支那にはたくさんの日本人がゐる働いてゐる。しかも支那

のことを知るには、これらは殆んど役に立たぬとして顧みられてゐない。貨幣の事でも排日のことでも風俗習慣のことでも地方々々で經濟利源など一に外人の書に依らなくては痒いところに手の届いたものがないとは情けない。又外國ではその書物がよく讀まれる。日本では大阪屋號と云ふ書店を説き伏せてやつと出版させそれも一千か二千に止まつてゐる。寧ろ日本で英文のものを出して、世界的にした方が得策であるが、とにかく洋書によつて支那のことを教へられてゐる知識階級の人が多いのである。これでは折角隣國であつて同文同種だとか云つてゐた甲斐は少しもない。洋書かぶれしてゐるわけでもあるまいか。洋書で支那のことをいつも先驅けされてゐるやうでは支那の調査知識は情けない。これと云ふが支那を本當に我舞臺と思つてゐない爲めである。支那を日本の延長、自分の店の延長と云ふ風に考へてゐてもらひたいものである。

尙本書「支那游記」の参考書類として拙著の最近公刊されてゐる者を左に列記する。本書に載せられてゐない支那社會、家庭、風俗趣味、山川風物人情ものなどはよろしくこれら参考書から補つてもらひたいのである。

支那游記の座右参考圖書		
支那文化の研究	(5,50)	富山房
支那の社會相	(5,50)	雄山閣
支那風俗の話	(2,80)	大阪屋號書店
支那趣味の話	(3,00)	大阪屋號書店
支那行脚記	(2,90)	萬里閣書房
支那國民性講話	(1,00)	日本大學
支那今日の社會相と文化	(1,00)	大日本文明協會
支那文化の解剖	(災震絶版)	大阪屋號書店
支那料理の前に	(災震絶版)	大阪屋號書店
日本から支那へ	(5,50)	北隆館

支那遊記

✓ 歡樂の支那

支那の田舎めぐり

長久の支那

不老長生

老朋友

創造の支那

文字の研究

文字の沿革 (建築篇)

文字の沿革 (一般)

漢字音の系統

支那地圖

漢字教育書各種

以上

(,50)

(,50)

(,50)

(,50)

(,50)

(,50)

(絶版)

(絶版)

(4,50)

(絶版)

(1,20)

八四四

北隆館

北隆館

北隆館

北隆館

北隆館

北隆館

成美堂

成美堂

日本大學

六合館

神谷書店

支那遊記

(をばり)

八四五

正誤の主なるもの

頁	行	正	誤
八	二	肝腎	肝心
四四	五	往き來	往ま來
六一	九	家廟宗祠	家廟宗祀
三八五	一	郷土と化せる	郷土化とせる
四二五	一	飛ぶ鳥も落さんず	飛ぶ鳥も落さんと
四三七	一	支那氣分に	支那氣分
五九六	四	徐樹錚、段氏幕僚、銃殺	
五九六	五	葉德輝、學者、銃殺	
七二二	五	吃飯	乞飯
七六一	五	喪	葬
七六四	一	行つても	云つても
八四〇	一三	在支邦人の間	在支那人の間

昭和二年十二月二十八日印刷
昭和二年十二月三十一日發行

支那游記

(定價金三圓五十錢)

著作者檢印



著作者

後藤朝太郎

發行者

和田利彦

印刷者

川村清次郎

印刷所

川安印刷所

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地

東京市京橋區木挽町三丁目十三番地

發行所

春陽堂

電話京橋六五二・四四一五番
振替口座東京一六一七番





